て唐の白居易の長篇を大休に示し、和韻を命じてゐる。時宗が常にこれを愛誦してゐたものであらう。乃ち大休は和韻一篇を呈し。自ら意を示してゐる。時宗は必ずこれを領會玩味したものであらう。この一事に依るも、時宗の學問趣味が察知せらるゝのである。

和守殿示至白居易長篇韵以自見意

道尊不レ在レ位、清聲四海宣、大辯猶如レ訥、春雷鼓嘿淵、得レ之由二自己一、何必問二蒼天一、上不レ攀二於聖一、下不レ負二於賢一、身不レ混二流俗一、名不レ寄宰官一、知レ足無二妄取一、知レ止何辱焉、有レ言警二於世一、時復寓二短篇一、石房香一縷、竹椅自安禪、萬般存二此道一、一味信二前緣一、勿レ耽二於泉石一、勿レ厭於塵寰一、縱使八風吹、心若二泰山一安、黃卷聊遮レ眼、白日常清閑、無二心與レ物競一、得喪不二相關一、健則措レ筇步、困則枕レ石眠、知世如二大夢一、終不レ惜二長年一、逍遙事物外、優游天地間、無二人知二此意一、忘懷自嘿然、不下因二智者一問上、應二是懶レ開レ言、

大休が時宗より筇を送られたるを謝して、和韵した詩がある。これに依れば時宗が筇に詩を添へて和韵を求めたものであることが判る。時宗が詩を作つたことは、一の異聞である。併し乍ら實際大休等と唱和したものであることを事實とせねばならぬ。北條氏の一族は、武人でありながら常に文事に意を注いだものであるが、殊に當時泰時の弟なる實泰の子である實時は、大に學問に熱中し、内外の群籍を蒐集蓄積した、時宗が夙にその感化を受けて學問研究を努めたものであらう。それで宋の禪僧等に應接し、彼等の詩文を領會し唱和するに至つたものと見ねばならぬ。

時宗が梅峯と號し諸禪僧の頌を徵したことが傳へられてゐる。

檀那守殿以梅峯表德號賦頌幷題頌什後

天然標格占二花魁一、鼎鼐調羹柱石才、玉蘂聯芳分二庾嶺一、雲開如レ畫碧崔嵬、

嘗聞梅之挺秀者、蓋其禀二受剛正一、不レ爲二寒暑所一レ遷、應二達人大觀之象也一、當二萬木搖落之季一、而暖力獨回、百花未レ放之際、而素艶先開、色性香潔、不二混三芳塵一、正味森嚴、參二調化育一、以三梅蘊二如レ是之粹德一也、故履世賢德之高士、出世得道之眞流、皆樂入二品題一、以想二像其爲一レ人也、今檀那徽猷守殿以三梅峯一、表二其德號一、特出二於千峰頂上一、瓊枝玉葉、芒寒色正、清香颯颯、四望欽聞、使二一切人觀レ之不レ足、仰レ之彌高一、可レ謂二人傑而地靈者一矣、予不レ拘二疎拙一、唱二之于首一、諸公從而和レ之、譬如三玉梅枝之低昂、花之上下盡在二春風和氣中一也、此什既出、誠一時之佳會可、

元將國書を呈す

弘安二年六月、元將厦貴、范文虎等、その部將周福、樊忠、譯語陳光、及び僧靈杲等を遣し、國書を持して太宰府に至り、國交を求めたが、その國書は禮を缺いてゐた。時宗命を傳へて周福樊忠等を博多に檻致して、首を刎ねた。

時宗元の國書の無禮を責め使を斬る

子元の一行來る

翌七月に子元祖元等の一行が、肥前の平戸島より筑前に入り、博多に到着した。彼等は時宗の請待に依つたものである。宋滅びたる後、大法を我邦に宣傳しようとし、時宗の請待に感激し、海陸の危險を冒して、漸く到着したものである。

時宗は子元を建長寺に請じて住持となしたが、軍國の經營は益〻繁劇であつたこの際時宗はこの新住持に依つて、益〻大に修養した。

時宗法語

數〻德詮宗英等を遣はして法語を求め、子元は每に懇到深切に示敎したのであ

を子元に求む

る。

## 答太守問道法語

夜來詮藏主言、和尙敎三太守拋二却公案一、世間雜念起時、將二甚麼一截斷、將二甚麼一對治、野僧應レ他曰、此是自己攝柄未レ得レ入レ手、自己眼目未レ開、假二借外料一、將レ物遣レ物、雖レ去二得一重一、又添二一重一、悟則無レ咎、不レ悟則擔閣、一世衆中兄弟、多有二此病一、萬事紛然之時、雖下將二公案一換中得念頭上、爭奈妙明圓滿淸淨虛覺之體、如二千日並照一、竟被二此樣話頭障却一、不レ能レ得レ見、只管別求二悟入一、譬如二欺レ楚投レ吳也、野僧奉二勸太守一、既於二公案一、不レ能二一笑氷釋一、咬嚼既久、未レ得二下落一、所以敎二一切颺下一、且聽心水定狂火息、要レ眠便眠、要レ坐便坐、於二三更半夜風前月下一、或睡將レ熟時、睡將レ覺時、或在二夢中一、東去西去時、或夢與二賓朋一往來交接時、或夢見二勝妙境界一時、試請自看、是甚麼物、恁麼變現、又開二却眼一、便見二山河大地草木叢林、一一分曉、展轉又入二夢中一、再見一覺時事體一、又向二覺中一再看二夢中影像一、此覺此夢皆非二他物一、只是一個猢孫子、或出或入、或來或去、百千萬樣直是無レ影無レ迹、雖二然無レ影無レ跡、影跡遍二滿大千世界一、在二凡夫一隨二一切聲色名利死生恐怖一、便隨二六道一輪廻、在二佛祖一不レ隨二聲色名利死生恐怖一、處處作用、處處出沒、處處遊戲、入レ火不レ燒、入レ水不レ溺、在レ方同レ方、在レ圓同レ圓、與二大虛一同一相貌、謂二之圓覺妙場一、號爲二眞如涅槃一、衆生目爲二無明煩惱一、初無二別法一、譬如二一口之中呵レ氣則煖、吹レ氣則冷一、豈兩氣耶、佛卽衆生之用、衆生卽佛之體、聖凡轉換、只在二飜覆手一爾、

時宗子元に參得す

一日時宗は師子頷下金鈴の話、及び巖頭浩浩塵中の話を以て、諸僧の著語を求め、後子元に示して可否を問うた。子元皆否なりとし、敢て許さない。且曰はく、老僧寧ろ日本國の飯を喫せざるべきも、佛法を以て人情に當つること欲せずと。次の日時宗は再び子元の所に至つて問うて曰はく、師子頷下金鈴の話何人かよく領會すと。子元曰はく、老僧にあらずばこの話を答へ難し。時宗卽ち曰はく、請ふ和尙これを答へよ、と。子元笑うて曰はく、相隨ひ來れ、と。時宗進んで問うて曰はく、浩浩塵中の話如何か說かん、と。子元曰はく、禪に參することは易く、道を悟ることは難し、道を悟ることは易く、禪を說くことは難し、と。時宗益〻迫つて子元の說を諦聽した。

會〻時宗子元の病に臥せるを聞いて、醫二人を遣はして灼艾をなさしめ、一問を提起して曰はく、和尙今日灸治す。是れ法身を灸するか、色身を灸するか、若し色身を灸すと謂はゞ、色身は法身を離れず、若し法身を灸すと謂はゞ、法身病無からんと。時宗が宗家の活用手段を弄したものである。子元は時宗の問難する所を聞いて莞爾として笑うたことであらう。卽ち一偈を打して時宗に贈つた。

夢に盧堂を見る

一雉通身烈焰紅、塵毛刹土煖烘烘、老僧忍痛無他意、只要衆生病掃空、

一夜時宗夢に徑山の盧堂智愚和尙を見て、大に異み、翌日子元の拈香を請うた。盧堂は運菴普巖門下の大禪德で、宋の咸淳五年に寂した。十餘年の後に、時宗が夢に和尙を見たのである。これは時宗が和尙のことを聞いて窃に景仰してゐたものであらう。その常に宗乘の參究に熱中してゐた事實が察知せらるゝでないか。

子元拈香して曰はく、盧堂背面無し。在る無く、在らざる無し。夜來扶桑を

元兵大擧して來寇す

過ぎ夢裡妖怪を興す、夢中の形、像中の眞、夢中像中兩彩一套、老和尙一香し、聊か是れ慇懃に當て、師の遠來を謝す。誠に易からず、と。

弘安四年忽必烈は我邦が彼使を刑したるを聞いて激怒し、五月先鋒高麗の將金方慶等兵船數千艘兵士二萬五千を發して、壹岐對馬に侵入した松浦黨の諸將等大に防戰して死傷が多かつた。尋いで元將范文虎等兵船三千五百艘、兵士十餘萬を發し、鎭西諸國の海岸に迫り、旌旗天を蔽うた。鎭西諸國の諸將が協力出陣し、兵士二十五萬と稱した。海岸の石壘に據つて防戰したが、數〻利を失い、必死に苦鬪して死傷が極めて多かつた。

幕府は鎭西諸國の急報に接し、安達盛宗、安達重綱、合田五郎等をして、中國の兵を率ゐて至り、軍事を監せしめ、益〻諸道諸國の精兵を募つて鎭西に會せしめ、防戰に全力を致した。尋いで宇都宮貞綱に命じ精兵六萬を率ゐて出發せしめた。實に我國空前の大役であつて、建國以來の一大危機に臨んだのである。

我邦空前の大役

二上皇の憂

後深草、龜山の二上皇を鎌倉に奉じ、東國の兵を以て京都を護らんとし、朝廷では、これを評議して幕府に傳へようとした。二上皇は深く國家の大難を憂し給ひ、殊に龜山上皇は親ら石清水八幡に祈禱し給ひ、尋いで春日神社日吉神社に幸し玉ひ、宸筆の願文を伊勢の大神宮に納め、自ら玉體を以て國家の大難に代らんことを祈誓し給ふに至つた。その御赤誠よ天地を感動せしむるものがなければならぬ。

時宗血書の經卷を供養す

この際時宗は、國土の安穩を祈禱し、自ら血を刺して『金剛經』『圓覺經』『般若經』等の大部の經卷を書寫するに至つた。子元はその供養の導師となり、願主時宗の熱烈誠實なる信念を發揚した。その一語一語に、鐵火の迸つてゐる心地がする。

我が此日本國主師平朝臣、深心般若を學び、爲めに億兆の民を保す。外魔四に來侵し、舉國怖畏を生ず。朝臣勇猛を發し。血を出して大經を書す。金剛圓覺及び諸般若、精誠所感の處、滴血滄海と化し滄海渺として際無し。皆是れ佛功德重重の香水海なり。照見すれば諸佛寶蓮に坐し、常に是の如き經を說き、一句一偈、一字一畫、悉く化して神兵となると、猶ほ天帝釋と彼修羅と戰ふが如し。此般若力を念じて、皆勝捷を獲る。今日本國、亦佛の加被を願ふ。諸聖神武の威、彼魔悉く降伏し、生盧皆安を得ん。皆佛の神力の故に世世般若を學び、佛の威猛力を報ず。

同年六月元軍は五龍山能古島志賀島に據つて平戸島に迫る。鎭西の將少貳資頼は兵士を督して防壘を築造し、海岸一帶數百町に及び、大に防戰してゐる。少貳覺惠、大友貞親、島津久經、秋月種宗、菊池武房、竹崎季長等の諸將、各

○鎭西諸將の奮戰

部下の精兵を率ゐて、血戰奮鬪して、數〻奇捷を得た。

○颶風起る

尋いで元軍は鷹島に據つて大に戰備をなすに至つたが、海面には帆檣林の如く、旌旗幕の如くであつた。閏七月一日の夜颶風俄然として西北より起つて、波濤簸揚し、元の兵船數千艘忽ち破壞覆沒し、左副都元帥阿剌帖木兒以下諸將及び兵士十餘萬人海中に溺死し、死體積んで山をなし港口を塞ぎ、海上遠く徒歩して行くことを得たと云ふ。殘兵數十人鷹島に在り、敗餘の兵船を修繕して逃走しようとしたが、少貳景資等乃ち部下の兵士を指揮し、一擊して殲滅し、俘虜數千人を博多に斬つた。范文虎等僅に數人、身を以れ逃走した。此の如くにして我國空前の大役を了り、建國以來の一大危機を脫したのである。

○元の兵船覆沒し將士溺死す

○大役了る

同月七日時宗の大功を賞して正五位下に昇叙せられた。

この大戰亂中、時宗は、幕府にあつて經營畫策したのであるが、一日も自己

大休法語を時宗に呈す

の修養を忘らず。子元から佛法中再來の人なりと言はれた。

大休が時宗に呈せる法語中にこの間の消息を漏らし、大に時宗の宗教的人格を發揚してゐる。

此一段事、從二空劫一以來、湛然不レ動、妙用洹沙、亙レ古亙レ今、不レ妄不レ變、超レ凡越レ聖、不レ染不レ碍、靈燭妙明、非レ假二煅煉一、是箇微妙大解脫門也、自レ古聖賢植二大根器一、乘二大願力一、故一聞千悟、直造二諸佛至淵至奥之域一、永劫無レ有二退轉一、然後推二其所レ證、向二他方一、此土隨レ類示現起、後得二大悲運無緣等慈一、莫レ不二直指一、一切衆生、本有佛性、超レ情離レ見與レ佛無レ殊、良由レ情生レ智、隔レ想變レ體、殊日用之中、爲二心境識所レ蔽、而不レ能二明了一、唯有二智慧過量人一、超然迥脫、明悟二自性一、圓同二太虛一、無レ缺無レ餘、空雖レ不レ碍二諸塵一、而亦不レ受二諸塵一云云

これより趙州無字の公案を提起して唱說し、その間要妙の處は意識の測るべきものにあらず、唯自知すべきものであるとし、更に曰ふ

只貴直下提撥不レ起二第二念一、忽爾囮地一下、擊二碎生死牢關一、便見二過去心不可得、現在心不可得、未來心不可得一、所謂一念不生、前後際斷方可二出生入死一、如レ同二遊戲之場一、縱奪卷舒、常自泰然安靜、胸中不レ掛二寸絲一、然立處既眞、用處得レ力、凡總二領百萬貔貅之士一、如レ驅二一夫一、攘二巨敵一、安二社稷一、立二萬世不拔之基一、是皆妙悟佛性靈驗也、既能如レ是、勿下以二有所得心一便以爲中足上、更須三密密履踐向二高高峰頂一立、向二深深海底一行、直使佛眼覷不見、千聖莫レ知レ蹤。方是箇大自在安樂人也、併成二一傾一、

直上高高峰頂立、體若虛空不往空、撥開向上一竅子、十聖三賢列下

時宗戰死の靈を弔す

風、
獨向深深海底行、沒蹤跡處露堂堂、時人只看波濤洶、不見驪珠發
夜光、

所謂忽爾因地一下して生死の牢關を擊碎すれば、生の喜ぶべきものもなく、死の悲むべきものもない。自然の大を領會して、人事の小を處理すべきである。併し乍ら本來大小を分つべきでない。再そ百萬の貔貅の士を總領して一夫を驅るが如く巨敵を攘ひ、社稷を安んじ、萬世不拔の基を立つること、是れ皆妙悟佛性の靈驗であると云へるに至つては、この際宗風を擧揚して萬丈の氣を吐けるものである。

後時宗は『金光明經』等を書寫し、十六羅漢等を造立して供養し、專ら亡靈を弔慰するに意を用ひた。毎に子元を請して供養の導師となした。子元は亦毎に時宗の赤誠を發揚すること努めた。

『金光明經』の供養に陞座して曰はく、

檀那經を書して亡者に報す。一念普遍す。諸佛刹香煙處處に佛事を作す。幽冥の路盡く豁開す。老僧此空空の法を說いて薦む。亡盧空覺の體、一靈不昧、湛然として存し、卽ち無生空法忍を證せん。

地藏菩薩一千體を造立供養す

尋いで圓覺寺の大禪林を建立して落成するに至り、自ら發願して地藏菩薩一千體を造立し、圓覺寺の一閣に安置し、子元を請して供養した。子元は導師となり、大に菩薩の靈威を顯揚し、大戰に死傷したる彼我の將士等の冥福を祈禱した。これ實に佛敎の法界一味寃親平等の大主意から出たものである。子元は供養の際これを明言してゐる。卽ち時宗が大戰後の心事を表白したものであると見ねばならぬ。

法界一味寃親平等

唯願くは大寶王日本國を補助し、我地堅固なること猶ほ妙高山の如くならしめ、我軍勇健なること猶ほ那羅延の如くならしめ、我歳豐稔にして民に飢餒の者なからしめ、我民安樂にして疫疾皆消滅せしめ、我國長久にして百劫傾動なからしめんことを。願くば我れ菩薩に奉じ、福壽二なから俱に勝れんことを。願くは最上乘を悟り速に菩提の果を證し、前歳及び往古、此軍及び他軍戰死と溺沒と、萬衆無皈の魂、唯願くは速に救拔し、皆苦海を超ゆることを得て、法界了に差無く、寃親悉く平等ならんことを、

**時宗の禪問**

圓覺寺開會の日、時宗大衆を供養し、自らその盛況を觀覽し、大休に問うて曰はく、齋中大衆の饅頭を咬んで破る者もあり、咬んで破らざる者もある。これは如何であるか、と。これ頗る奇問であるが、實は宗乘を談論してゐるのである。大休仍ち一偈を成し時宗に示してゐる。

**時宗田莊を壽福寺に寄附す**

當陽拈出鐵酸餡、普供十方賢聖僧、無齒趙州親咬破、也知有箇得人憎、

後時宗は圓覺寺壽福寺に田莊を寄附して、子元大休等を禮遇してゐるのである。

大休曰はく、切に聞く、先聖言へるあり、「佛法は國王大臣有力檀那に付囑し、法を令て久しく住せしむ」と。緬惟ふに最明寺殿在る日、深く宗乘を慕ひ、伽藍を建立し、田宅を喜捨し、眞風今に至つて墜ちず。玆に又承る、檀那守殿淸白家を傳へ、三寶を興隆し、超宗の異目を具す。猶ほ大に人に過ぐる者あり、所謂靑は藍より出でゝ藍より靑きものなり。而るを況や壽福常住素薄なり、今産業を撥置せられ、僧を安んじ、道を行ず。實に大乘菩薩の人、心を叢林に用ひ、草木恩に霑はざるなし、云云。時宗が父時賴の遺意を受け、常に宗風の興隆を謀つたものである。

大休藏六菴の額字を時宗に乞ふ

西來祖道盡流東、有力檀那顯正宗、撥斷障雲輝佛日、剗除解碍見眞空。

大休壽福寺にあつて藏六菴を造營し、時宗に藏六菴の額字を請うた。これには自ら由來があつたやうである。

上二守殿一二偈、求二塔菴藏六菴額一、並序引

切惟曩住二禪興一日、因夜夢二觀音大士一、乃問二前程隱密之事一、大士曰、逢レ强卽止、十年間參詳不到、前載忽省、密識乃知、强字卽龜字也、聖意雖レ不レ明、說二字義一極是炳然、遂於二壽福一、鑿二開巖壁一、建二殿宇一、立二聖像一、以酬二聖識一、而況年僅七十、來日無レ多、擬二意於當山經藏側一、造二生塔一所、庵屋數間一、以爲二末後皈眞之地一、今將二落成一、欲下求二大手筆藏六菴額一、表而出ㄴ之、非二惟泉石有レ所レ增レ輝、抑亦永爲二外護之緣一、輒成二二偈一、申呈、得レ垂二電覽一、不レ勝二榮幸之至一

百齡七十稀、來日亦無幾、白髮催人老、青山何所歸、報緣虛幻事、寂滅是眞依、却憶南陽塔、團團月影輝、

生前親卜地、要在識時宜、六用龜藏密、全機佛莫窺、一言祈外護、百載想風規、此額今彌滿、檀心荷見知

幾もなく時宗の額字が藏六菴に懸けられた。大休大に感喜して詩偈を賦し、尋いて釋迦牟尼佛等を安置し、常にこの菴に隱棲して老軀を養ひ、外に出でなかつた。

藏六菴掛額

天然這片閑田地、未跨龜峰話已周、一念不生三際斷、六根藏密萬機休、他方此土隨緣住、潭北湘南當處收、祇箇歸根得旨地、何須葉落始知秋、

二偈呈二守殿一乞レ歸二藏六菴一

大休語錄を編し序文を時宗に乞ふ

水牯眠昏兼齒豁、那堪筋力已摧殘、雪山水草雖香潔、老病應慚下口難、
龜峯幸有六藏地、嘯月眠雲自在閑、得遂老懷皈逸願、感恩戴德重丘山、

自ら語錄を編修し、時宗に序文を請うに。時宗が宋の禪僧の求めにより、額字を書し、序文を屬すと云ふに至つて、益驚かるゝのである。併し乍ら時宗の學問修養の事實を詳にすれば、決して異まるべきことでない。大休がこれを請へるは寧ろ當然である。白底は是れ紙黑底は字、君の妙筆に冕つて春風を判ぜんと言つてゐる。時宗は必ず一拶を與ふべきである。

上二相模守殿一求二語錄序一

如來藏教周沙界、金口何嘗動舌頭、信得無說而說法、方知恩大實難酬、
西來達磨傳心宗、心離名言不住空、直指人心心卽佛、河沙妙義在其中、
大休一語不曾措、開口無非大脫空、白底是紙黑底字、憑君妙筆判春風、

時宗蘭谿の書背に法華經を寫す

時宗は大休の請を領して後、未だ幾ならずして疾に罹つた。大休は深くこれを憾み、後に語錄の首に自らその始末を記錄してゐる。時宗の序文が大休の語錄に掲載せられたならば、如何に光彩を放つたであらう。今日これを想像するだに愉快である。

時宗が宗門に歸向した最初の師は蘭谿であり、次の師は大休である。併し乍ら大休は自ら師とならず、子元を推擧したのである。

時宗は常に蘭谿の恩德を思ひ、誠意を致し、その入寂の後、蘭谿の書背に『法華經』を書寫し、子元に示して跋を求め、子元跋を書し珊瑚枝と月と新を爭ふと言てゐる。

太守以二開山和尙書背一寫二蓮經一求レ跋、而成二一偈一、
古人三語報師恩、守殿書經事更親、更著老夫題半筆、珊瑚枝與月爭新、

時宗亡父亡弟の冥福を薦修す

後蘭谿の忌辰に丁つて、法會を嚴修して供養してゐる。その師に對し極めて篤實なることが見らるゝのである。

時宗が先考時頼及び亡弟武藏守宗政等の忌辰に丁り、毎に子元大休等を請して法會を嚴修してゐることは、一家の小事であるが、時宗の平素の行狀が察せらるゝ心地がする。

殊に先考時頼を追慕して冥福を薦修し、釋迦牟尼佛の畫像を造立し、『法華經』『圓覺經』を書寫し、子元を請して供養したことが傳へられてゐる。子元は供養導師となり、時宗の心事を開說してゐる。

年年霜露念慈容、罔極恩深報莫窮、回首廓然三際斷、靈山一會起香風、

大休曰はく、檀那相模守殿親恩を追念し、昊天極り罔し、山僧に命じ靈に對して普說しめ、以て孝恩の誠を表せしむ。然り而して崇公禪門本性圓明眞空に

時宗病に罹る

落髮受衣

卒去

して、自ら悟る。修證恁麼の說話を假らず、已に是れ雪上に霜を加ふ、云云。

弘安七年四月時宗病あり四日巳尅子元を仰いで落髮し、法號を法光寺道杲と云ひ、法衣を附せらる。

檀那法光寺殿落髮

了了知、了了見、生滅根源、一刀裁斷、斬新風月付兒孫、枝枝葉葉無邊春、

付　衣

佛祖祕要、似空藏空、包裏不及、絕羅絕籠、山重重、水重重、迦葉不住雞足峯、

卽ち法衣を受け了了として一偈を書し、同日酉尅晏然として卒去した。一期三十四歲である。嗚呼此の如くにして絕代の英雄は最後を告げた。

起龕　大休正念

浮世三十四年事、好似南柯一夢中、識得本來無一物、內空外空內

外空、秉二貳帥權一功業就、夢殘撒レ手沒二行蹤一、萬古長空絕二雲點一、朗然明月拂二清風一、大衆這箇是檀那杲公、末後一段大光明藏、諸人還相委悉麽、苟或未然、更聽壽山別開一路、信仰踏飜十華藏、金烏夜出海門東、

## 下火

梅子青青著子時、花殘鶯老燕初飯、天開地闢山河靜、解脫門開知不レ知、故我大檀那杲公禪門、乘二一願力一而來、依二刹利種一而住、視二其所以一、觀二其所由一、有二十種不可思議一、何謂二十種一、事レ母盡レ孝、事レ君盡忠、事レ民收惠、參レ禪悟レ宗、二十年握二乾坤一、不レ見レ有二喜慍之色一、一風掃二蕩蠻煙一、略不レ有二矜誇之狀一、造二圓覺一以濟二幽魂一、禮二祖師一以求二明悟一、此乃人天轉振爲レ法而來、乃至臨終之時忍レ死以受二老僧衣法一、了了書レ偈而長行、此是世間了事凡夫、亦名二菩薩應世一、老僧托レ公以了二殘生一、不レ料先二我一著一而去、世相難レ期、空華易レ落、一笑飜レ身、兜率相見、老僧末後句子、此時更要二提撕一、以レ火打二圓相一、烈燄光中如薦得、優曇華放百千年、

子元の吊偈

子元が龕前に炬を秉り老僧公に托して殘生を了せんとし、公忽ち一著を先じて去り、世相期し難く、空華落ち易し、と言へるは、悲痛哀惜を極めたものである。一笑して身を飜し、兜率に入つて相見んと言へるに至り、聽く者をして嗚咽泣涕せしめたものであらう。

乃ち吊偈六首を賦して、滿腔の心情を吐露し、師弟の誼を說いて、父子の親に似てゐる。この師があつて、この弟子があつた。

悼法光寺殿六首

大休の吊語

遠佩迦文肘後方、重尋鶴肋貴傳芳、感公西望焚香立、故我迢迢出大唐、
自說工夫未徹頭、一拳之下辨金鑰、從茲放却閑驢馬、海晏河清七十州、
喫了拳頭拔本難、請師塔樣太無端、灼然一點難名邈、直入無生國裡看、
賞公百計解咨參、得路行時越放憨、自笑戶門無鎖鑰、不知偸入老僧龕、
黃金城郭吾爲主、不奈彼君先手何、留得老夫看破屋、風前不覺笑呵呵、
故園田地已荒蕪、濁世非吾可久居、賸欲追君便行上、念君孤寡沒人扶、
百日の忌辰に丁り、大休上堂して云はく、我れ昔日本國に渴來し、君の知遇を荷ふもの常に非らず。我れ佛海未了の緣を了し、君最明寺の遺芳を續く、施を三山に受くること十六載。今年七十鬢霜の如し。禪林在在悉く昌盛し、皆自ら外護し、頽綱を振ふ。夫何ぞ法門の不幸なる、遽爾とし夢黃粱に熟す、云云。

法光寺殿幼にして西來直指の宗を慕ひ、早く卽心卽佛の旨を悟る。是に由りて上乘を仰鑽し、小節に拘らず。大圓覺海に游泳し、深く了義の法門を樂みたり、云云。

時宗夫人秋田氏華嚴經を書寫す

時宗は初め大休より卽心卽佛非心非佛の公案を得て參究したが、後子元より公案を抛却せしめられた。併し乍ら實地に卽心卽佛非心非佛の主意を接得せられた。今大休は時宗が早く卽心卽佛非心非佛の主旨を發悟したことを讃嘆してゐる。これは必ず意義あることでなければならぬ。

時宗夫人秋田氏は落髮し、法號覺山と云ひ、專ら時宗の冥福を薦修し、大に發願して『大方廣佛華嚴經』を書寫し、晝夜筆を執りて精勵し、期年ならずして全部八十一卷を書寫し畢り、時宗の三年忌辰に丁り、子元を請して供養するに至つた。

子元卽ち法座に陞り『大方廣佛華嚴經』の大法門を顯說して、時宗の功業人格

を稱揚し、夫人の大發願を讃嘆し、自ら堂堂たる一大文章をなしてゐる、

法光寺殿第三年忌覺山大師自書華嚴大經請陛座

毘盧藏海性覺寶王、無起無滅、無終無始、一塵を立せず、法界に周遍し。一物を倚せず、十方を含攝す。湛湛をして虛明獨り耀き、澄澄として海印光を發す。東西南北遮欄沒く、明暗色空俱に著せず。千靈跡を絕し、萬化根を同うす。之を迎ふるに其形を見ず。之に背いて其跡に迷はず。千日も其明を比すべからず。衆寶も其色を奪ふべからず。全く象外に超え、獨り無雙に拔く、此は是れ衆生の覺地、亦如來の法身と名く、天地も此に依りて而して建立し、日月も此に依りて而して照臨し、星宿も此に依りて而して轉運し、雷霆も此に依りて發聲し、十地の菩薩も此に依りて而して種智を圓滿し、四果の聲聞も此に依りて而して大乘を策發し、山川も此に依りて而して負載し、草木も此に依りて而して敷榮し、江海も此に依りて而して流注し、六道も此に依りて而して往來し、鬼神も此に依りて而して變化し、鳥獸も此に依りて而して飛騰す、大なる哉性覺、斯の如く廣大、斯の如く雄猛にして、重量無盡、無盡重量、十方の諸佛之を宣へて盡きず。四果四向啞の如く、聾の若し。此は是れ毘盧遮那の體、十方國土に普遍し、一切衆生を調伏し、諸塵勞に入りて方便善巧し、而して法性本來空寂なり。

只覺山上人一年に周せず、華嚴妙典八十一卷を書寫し、法光寺殿に報薦するが如きは、功何の處にか歸す、轉身の一歩方便を超え果は園林に滿つ劫外の春。

復云はく人生百歲、七十の者稀なり。法光寺殿齒四十に滿たず。功業を成就すること、却りて七十歲の人の上に在り。看よ他、國を治め、天下を平定し、

喜怒の色あるを見ず。矜誇衒耀の氣象あるを見ず。此れ天下の人傑なり。自如たり、弘安四年、虜兵百萬博多に在れども、略ぼ經意せず、但毎月老僧を請して諸僧と與に下語し、法喜禪悅を以て自ら樂めり。後果して佛天響應して、家國貼然たり。奇なる哉、此力量あり、此れ亦佛法中再來の人なり。

佛說たまふ、菩薩人梵行を進修すれば、復菩薩ありて、或は妻子眷屬となり、種種菩薩諸の梵行を修するを成就し、其をして圓滿ならしむ。

今日覺山上人法光寺殿と、曠劫以前毘盧遮那會中誓願深重にして、生を人間に示し、王臣となることを示し、夫婦となることを示し、權貴となることを示し、生死をなすことを示し、虛幻をなすことを示し、悲悼をなすことを示し、大勇猛を發し、此大經を書す。人の行ひ難き所を行うて、天下の人をして感動し、菩提心を發し阿耨多羅三藐三菩提を成就せしむ。奇なる哉、讃も能く盡し難し。伏して願ふ、法光寺殿一靈不昧、地頓に超え、子孫を芘祐し、永く吉慶を隆にせんことを。

復偈を說いて曰く、

毘盧大經等大虛、只在衆生心識裏、衆生迷背自不覺、破一微塵齊顯現、四大海水渺無邊、不抵上人一滴墨、盡大地土不可量、上人點墨勝千倍、十地菩薩發大心、河沙聲聞非可比、速證菩提行願海、盡在上人筆端上、一洗恩愛浮幻塵、回看洗者亦是幻、水月光中了此身、金剛三昧悉圓滿、

鎌倉時代に北條時宗があつて、大に武士の社會が光飾せられたのである。時宗は鎌倉武士の面目を發揮して、理想的の一大典型となつたものと見らるゝのである。

時宗の天資固より英邁雄偉であらう。併し乍ら常に學問修養を努めたことを

知らねばならぬ。その結果時宗の精神生活は大に豐富となつた。彼一大人格が清新活潑なる新宗敎たる禪宗の宗乘の研究に依つて資成されてゐるものであることは殆ど疑を容るべきでない。

我邦の佛敎史の上より觀れば、佛敎の實際方面の主觀的發達と見らるゝ修禪の宗門を體得して、一大精神力を成し、始めて國家的社會的に活現發作したものである。この點より見て時宗は理想的の一大佛敎信徒である。

**大役の影響　朝廷の威光の發揚**

文永弘安の大役が、我邦の國家社會に著大なる刺擊を與へたことは云ふまでもない。殊に朝廷の威光が發揚せられたことが注目せらるゝのである。朝廷は幕府の武備を信賴せられてゐたが、その威光は益〻大に加はり、國家の大難に際し全く人心を統合し、擧國一致の實が見らるゝことゝなつたのである。

建長寺の祈禱の願文に、永く帝祚を扶け云云と言へるが如く、時宗は大義名分を明らかにすることを努めた。朝廷の威光を仰いで軍國の經營をなしたもので、大事は一一奏請して決行したものである。大休が時宗の忌辰に丁り、上堂して封彊を恢拓して上に皇祚を扶くと言ひ、海隅の蒼生咸な德に感ずと言へるは、決して空言でない。

**大役後の人心の趨向**

文永弘安の大役に際し、朝廷の威光が發揚せられて後、自ら大勢の趨向する所があつた。然るに時宗の後幕府に人材なく、大役後の經營が錯られた。一面から觀察すれば、かの大勢の趨向する所が、遂に建武中興の大業に至つたものである。

【佛源禪師語錄】　送守殿新茶二兼謝惠茶間與趙州同別　（大休正念）

百草頭邊占早春、玻璃盞泛乳花新、淡中無味有餘味、舌本還他具眼人、

收卷鎗旗喜太平、靈機轉處睡魔驚、簾垂晝永無餘事、一吸風生兩腋清、
淨名丈室分甘底、雀舌春先未足奇、一味異光清透頂、直教趙老竪降旗、

謝守殿送割子紙

一字從來不着畫、分明文彩已全彰、玄沙縱得聲前句、未免重加雪上霜、

謝送菖蒲石

九節虛苗清更幽、泓泉拳石冷涵秋、淡然相對忘情謂、難掩春風桃李羞、

謝送筍和韻

龍子龍孫頭角露、森然箇箇盡空心、他時一擊庭前看、飕飕清風伴鳳吟、

謝守殿送柏樹

庭前柏示祖師心、葉葉枝枝疊翠陰、傲雪凍霜無變異、孤標千古振叢林、

謝送小袖

山寒水冷客稀逢、喜見東君信息通、但覓春風生小袖、不知身在白雲中、

【佛光國師語錄】四　大守送菖蒲石　（于元祖元）

一峯寒浸碧琉璃、琅打枯巖水半欹、髣髴去年天海外、客帆初到博多時、

題謝太守送水晶硯連

陶泓漠漠走煙煤、萬里滄波鏡面開、莫訝水晶宮殿冷、更看玉兎夜懷胎、

謝大守惠直綬

機先拋出一絲頭、蓋覆盧空體已周、萬里月明千障外、海雲垂地不曾收、

# 第九章　子　元

弘安元年五月、蘭谿が建長寺に歸住して後、時宗は常にその接化を受けて修行し、發願して一大禪林を造營しようとし、蘭谿に謀り淨地を相した。然るに幾もなく蘭谿が病に罹り、遂に入寂したから、時宗は新に宋から高僧を請待しようとする意があつた。

當時鎌倉には、宋僧の大休西磵の二人が聞えてゐた。殊に大休は時宗の供養を受けて、大に宗風を擧揚してゐた。幾もなく西磵が西歸して後、大休は益、崇重せられてゐた。大休が時宗を敎養した事實は、極めて著しいことである。それで一方から大休が時宗を奬勵して新に宋の高僧請待のことを決行せしめたものであらう。この場合必ず當に然るべきことである。

北條時宗の請帖

同年十二月時宗請帖を作つて自署し、建長寺の德詮宗英の二禪僧を宋に派遣して高僧を請待することゝした、その請帖に依れば、時宗が專ら高僧の接化を受けて修行しようとするにある。

宋朝の滅亡

時宗留意宗乘、積有年序、建營梵苑、安止緇流、但時宗每憶樹有其根、水有其源、是以欲請宋朝名勝、助行此道、煩詮英二兄、莫憚鯨波險阻、誘引俊傑、歸來本國爲望而已、不宣、

弘安元年戊寅十二月廿三日　　時宗和南

詮藏主禪師

英典座禪師

然るに宋朝は衰敗し、帝昺が一縷の餘命を崖山に寄せたるもの亦一戰潰盡し擧族海中に投じて溺沒するに至り、悲慘凄烈を極めた、宋朝の供養を受けてゐ

た諸大刹は、皆大に災害を被り、諸高僧が數〻禍難に罹つた。この際德詮宗英の二禪僧が、彼地に到着したのである。恰も崖山沒落の後三月、卽ち我弘安二年、元の至元十六年五月に、明州の天童山に登り、子元祖元を問訊し、時宗の請帖を捧げて切に東渡を請うた。德詮宗英の二人が諸大刹を歷訪し、殊に天童山に登り、第一座子元祖元を問訊して時宗の使命を果さうとしたことは、初めより理由があつたことで、子元の經歷行狀を見れば、自ら領會せらるゝのである。

德詮英の二人子元を問ふ

子元の經歷

子元諱を祖元と云ひ、別號を無學といふ。明州慶元府鄞縣の人、許伯濟の子で、母陳氏、夙に佛敎を崇信してゐた。宋の理宗寶慶二年丙戌に生れ、七歲家塾に學び、十二歲父に侍して山寺に遊び、禪誦の聲を聞いて欽慕し、十三歲父を喪ひ、遂に杭州の南山淨慈寺に投じ、北礀居簡の弟子となる。幾もなく徑山萬壽寺に至り、無準師範の室に入り、大に宗乘を參究した。當時同室に我邦の圓爾、道祐、性才、一翁等が留學してゐた。子元は早く彼等のことを聞知したであらう。無準が入寂して內外の弟子數十人が四散した。子元亦その法を傳へて徑山萬壽寺を去り、北山靈隱寺に至つて、石谿心月に見え、尋いで明州の阿育王山廣利寺に至り、偃溪廣聞に見え、萬壽寺に還り、尋いで再び淨慈寺に至り、新住持偃溪の接化を助けた。後靈鷲大慈等の諸禪刹を歷訪し、到る處で推重せられ、道譽大に流敷するに至つた。

子元の家風

景定三年三十七歲里人羅季勉の請によつて、白雲菴に住し、老母を迎へて奉養し、七年の間他に出でなかつた。その枯淡淸素の生活の狀況が、詩偈に依つて見らるるのである。

白雲菴咄咄歌　節錄

一衲蒙頭息萬機、家風凄冷客蹤稀、當門撞破蜘蛛網、獨有春深燕子歸、
蕓魁種得大如拳、不怕深冬百衲穿、火冷雲深消息絶、從教黃葉滿階前、
閑思鍋竈幾千般、燈盞無油紙燃乾、座到三更室生白、壁邊主丈照人寒、

菴中與老母守歲

燈前殘鬺苦無多、相對無言意若何、一錯路頭嗄峽遠、三生煙冷舊磐陀、
風攪長林雪滿牀、寒藤無葉倚空桑、誰知戸破家殘處、添得黃粱客夢長、
東山消息久茫茫、累汝懷耽又一場、樹樹老松寒照雪、鑊頭無口孰添鋼、

寄子元住白雲菴侍母　天寧可舉

梁國踟躕望白雲、何如共處寂寥濱、巡簷指點閑花草、說老婆禪向老親、

台州の眞如寺に住す

咸淳五年四十四歳再び靈隱寺に至り、首座寮に在り、十月二日太傅賈似道の禮請により、台州の眞如寺に住し、同月二十日入院して四衆を開化した。似道が虛威を張つて敗退し、逐に殺害せられた後、子元は卽ち戰亂を避けて雁山の能仁寺に遷つた。然るに元兵その地方を陷れ、群卒寺境に亂入して狼藉を極むるに至り、大衆皆逃奔竄匿したれども、子元は獨り僧堂に在つて、一榻に兀座してゐた。一卒卽ち子元に迫り、白刃を頭上に加へたが、子元は神色毫も變ずることなく、徐に一偈を朗誦した。群卒その狀況を見て驚異し、皆共に悔謝して去つた。その一偈は實に彼等を法化したものであつた。

元兵を法化す

乾坤無地卓孤筇、喜得人空法亦空、珍重大元三尺劍、電火影裏斬春風、

珍重す大元三尺の劍、斬らば斬れ、老僧の首は、決して惜しむべきものでないと。これが子元の宗乘である。

景炎二年五十二歳天童山に登り、住持環谿唯一の會下の第一座となつた。後二年時宗の請帖を得た。我邦の德詮宗英の二人は夙に同門の圓爾等から子元

子元東渡す

のことを聞知してゐたであらう。子元は道友古澗が日本から還つて北條時賴が武將であつて、禪僧の行業をなし、儼然として坐脫したことを傳へ聞いて大に感嘆し、常に日本を思慕してゐたのである。時宗の請帖を見るに及んで、乃ちその盛意を領し、欣然として渡航のことを決したもので、深い宿緣があつた。

乃ち元の至元十六年六月、子元五十四歳である。上堂して環谿から無準師範の表信の法衣を轉附せられ、一峯等に送くられて、天童山を下つた。

世路艱危別故人、相看握手不知頻、今朝宿鷺亭前客、明日扶桑國裡雲、

六月二十日に船に登り、東渡の途に就いた。環溪の法嗣鏡堂覺圓等が隨侍し我入宋僧桃溪德悟、龍峰宏雲等數人が同伴してゐた。子元は常に我入宋僧等から我國情を聞知したことであらう。それは船中で八幡宮賀茂廟に順風を祈請したことに依つても推斷せらるゝのである。

肥前の平戸島に入る

鎌倉に入る

八幡宮祈風

風駕寒潮苦打頭、連宵祠下覺遲留、聖君速轉西南信、鳳翼翩翩送客舟、

賀茂廟祈風

佛道如今已向東、王臣命我振玄宗、勿忘當日靈山囑、惠我西南一棹風、

我弘安二年七月肥前の平戸島に入り、始めて我邦の風物に接し、それより近海を經て、筑前博多に到着した。

題平戸島佛堂

乘槎專爲上乘來、入境高標念佛牌、下瞰漁家千百戸、腥烏不敢入僧齋、

東海道を陸行し、駿河の海岸を經て淸見寺に入つて風光を觀賞した。

題淸見寺

暫歇征鞍此地遊、回看廣岸一沙鷗、欲留姓字無新句、馬上頻頻又轉頭、

建長寺住持となる

八月に鎌倉に入り、同月二十一日時宗の禮請を受けて建長寺の住持となる。即ち同日一山盛儀を整備し、子元法座に登つて、祝聖拈香して曰はく、

開堂拈香

此一瓣香は、恭しく
今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬萬歲を祝延し、陛下恭しく願くば日の明かなる如く、天の普きが如く、九州共貫有截の區を幷包し、三景同光、無疆の祚を申錫せんことを。

次に拈香して曰はく、

此一瓣香は仰いで
大將軍都元帥國公を祝す。伏して願くは、福は大地の春の如く、壽は劫石の固に同しく、資倍祿算永く邦家に祚せん。

次に拈香して曰はく、

名分を正うす

此一瓣香は仰いで
相摸太守都總管を祝す。伏して願くは福は滄海に同じく、壽は須彌に等しく、長く佛法の金湯となり、永く皇家の柱石と作らんことを。

次に拈香して曰はく、

此一瓣香懷き來る三十餘年、未だ嘗て容易に拈出せず。爐中に爇向し、前住大宋國徑山佛鑑禪師無準大和尚に供養し、用ひて法乳の恩に酬いん。
先づ天皇の聖壽を祝し、次に將軍の壽を祝し、次に執權北條時宗の壽を祝し、大に名分を明にしたものである。殊に執權北條時宗の壽を祝して、長く佛法の金湯となり、永く皇家の柱石とならんと言へるは、必ず意義あることである。
宋の大禪林は、宋の朝廷の供養を受けて興隆したものであつた、宋の朝廷の危急に臨み、大禪德が國事を憂慎し大衆を激勵したことが、自ら宗風を成した。

今この盛儀は宋の大禪林の清規に依つたものであること云ふまでもない。併し乍らこの拈香の法語が悉く摸倣的形式的の言であると見てはならぬ。子元の宗風は潑溂たる生氣の横溢してゐるものである。この際徒に空言を弄すべきものでない。

建長寺は亢菴普寧が西歸の後、大休正念、義翁紹仁が相次いて住持となつてゐたのであるが、こゝに至り子元が新に住持となり、葦航道然、桑田道海、桃溪德悟等を擧げて禪林の諸役となし、一山清肅を極め、鐘鼓新響を發する狀況であつた。

圓爾一翁等は、一門の宗風の盛興を聞いて大に喜び、圓爾は京都より數書を送つて問候し、一翁は下野の長樂寺より來つて禪林に入つて示教を請ひ、遂に弟子となつた。尋いで高峯顯日、規菴祖圓等來歸する者益多く、一門の下大に繁興すること、なつた。

大衆を策勵す

子元云はく、祖元は大唐無似の衲子なり。初めより寸長なし、但只四十餘年蒲團と對頭をなし、亦曾て經教文章を看ず。所參所到只是れ自己を了得す。何の暇か餘力の人の爲めにすることあらん。衆中に在り、初めより曾て人前に出づることを要せず。處處人に板首に推出せられ、叨に台州の眞如を忝うす。亦是れ朝廷に逼迫出し去らる。將に天童に歸りて死を待たんとす。又板首に推出せらる。何の因緣なるかを知らず。故に太守總管元帥の招を蒙りて建長に住す。自ら四來の學子に應酬すべきことなきを愧づ。只單單に佛祖遺下の金剛圈栗棘蓬を以て、學者に布施し、是なれば則ち是と言ひ、非なれば則ち非と言ふ。敢て人情を看て人に假借せず、云々。

一方鎌堂は時宗の禮請を受けて、禪興寺の住持となり、子元の法化を助け、

時宗の盛意に對し、深く感激してゐた。

述呈太守　鏡堂覺圓

法輪未轉食輪先、供衆由來大福田、珍重深恩何以報、祝君壽等趙州年、

鏡堂禪興寺住持となる

子元は蘭谿の事業の後を受けて、禪宗の興隆をなしたるものである。建長寺住持となつて後、開山蘭谿の功勞を顯揚しようとし、大に意を用ひた。勅ありて大覺禪師の諡號を賜はるに至つたもの、全く子元の推奬によつたものである。

蘭谿の功勞を推奬す

古來天台宗の附庸であつた禪宗には、天台宗の僧侶が禪宗を傳持し弘通してゐたもので、未だ一人の禪師と云はるべきものがなかつた。榮西道元圓爾等が皆天台宗の僧侶であつたこと云ふまでもない。然るに蘭谿は宋より歸化したもので、禪宗の僧侶である。今この事實を認められ。勅あり禪師の諡號を賜はるに至つたことは、禪宗の一大盛事である。始めて禪宗の僧侶が諸宗の僧侶の間に獨立の位置を得たものと見らるゝのである。大休が大に喜んで三偈を賦して、蘭谿の塔に捧げたが、これは叢林歡呼の聲を代表したものであつた。

禪宗僧侶の位置

子元蘭谿の忌辰に上堂す

會蘭谿の忌辰に丁り、時宗の請により、新造の佛像新刻の『圓覺經』を供養し一山の大衆に對して普說し、大に時宗の誠意を顯揚し、蘭谿の盛德を稱讃した。

太守今晨開山大覺和尚遠忌の辰の爲め、如來の聖像を彫造し、圓覺了義經を彫刊し、山野に命じ普說せしむ。一は則ち大覺を光顯し、二は則ち聖像を慶懺す。尤も太守法の爲めに舊を存する念切切なるとを見る。大體佛祖出興して自ら說法し、是れ人天國王大臣主張し、外護すべくして、方に以て法幢を建立すべし。若し人天國王大臣の主張無くんば、佛祖の說法成らず。何爲ぞ此の如くなる、魔王の伴侶衆多なる故なり。豈見ずや、法華經中に道はく、如來得法の國土三界に王たれとも、而も諸魔王肯て如來賢聖に順伏せず。諸

將これと共に戰うて功ある者は、法王歡喜して賜ふに禪定解脫根力覺道の法を以てす。此を以て之を言へば、諸佛の出世豈能く獨立せんや。

今日太守大國の生靈を保持し、又佛祖の道を保持す。但國家の將相たるのみにあらず。亦是れ如來の將相なり。山野冐然として此に來るは、太守一力に主張し、一力に外護するにあらずんば、亦法幢を建立し難し。太守朝朝暮暮、念念心を此道に留め、念念心を老僧に留む。靈山會中金口の付囑は乃ち今日に見る。老僧衆中の兄弟、波傾き瀾倒るが如く牽挽すれども回るべからざるを憂嘆す。時ありては風前月下に嘆息して已まず。太守佛法を憂念すること切なるに撞着して、頗る自から山懷に相合ふ。一半は歡喜し、一半は煩惱す。歡喜は太守佛法を痛念するを歡喜す。敢て太守に問ふ、老僧更に一半の煩惱なり。煩惱何れの處にか在る。太守若し佛法に參透せば大幸なり。云云。

日中諷經の例を聞く

當時元は新勢力を以て、數、我邦に迫り、警報四傳し、我邦上下騷然として人心安からざる狀況であつた。

子元は建長寺の大衆を率ゐて、長日『法華經』を讀誦し、專ら敵國降伏の祈禱をした。子元は宋の僧侶である。元は固より敵國である。殊にこの際建長寺住持にして、大檀那の憂患を見て、滿腔の誠意を捧げたものである。

元來宋の禪林に、日中諷經の例がない。然るに子元がこの際日中諷經の例を開いたのである。これは全く子元が滿腔の誠意を捧げた事實と見ねばならぬ。爾來永く日中諷經が我邦の禪林に行はるゝことゝなつた。これは端なくも一大紀念となつたものである。

當時幕府の諸將士の禪を修する者甚だ多く、鎭西に出陣するに臨み、率ね子元大休等の會下に問訊し、生死の問題を提起し、示教を請うたのである。子元

出陣の將士を教化す

は彼等の爲めに、極めて懇到深切に示教した、その會下に問訊した者には、宮内平衛門、備前太郎、越後孫太郎、諏訪左衛門、糟谷三郎左衛門、信州四郎左衛門、稲津左衛門、藤長宗右金吾、長崎左金吾等數十人の名が傳へられてゐる。子元は一一彼等に法語を與へてて接得した。

太宰少貳に示教す

太宰少貳に與へたものは、固より一分の事實であるが、その實際の狀況が想察せらるゝから、一二節を掲出することゝする。

問を承る。坐禪如何か用心を要せんと、坐禪は、用心の處なし、衆人日用具足圓滿如來と一般なり。只衆生自信及ばざるが爲め、只他をして足を疊んで跏趺端然として坐せしむることを得たり。復た自心を以て自心を求覓す。之を求むれば轉遠して便ち多等の差別異見あり。如今安撫太宰若し工夫を做さんと欲せば、先づ佛前に對して、香を炷き、大誓願を發し、欲漏を斷除し、私心を併去し、正念にして坐せよ、或は目を開き、或は目を閉づるは、却つて問はず、但思へ、父母未生已前の面目、即今那裏に在るか。忽然として一朝命光遷謝せば、即今孤明歷歷底、又何の處に在るか、只自己に就いて看よ。自己内に在らず、外に在らず、中間に在らず、眠にも也看よ、坐にも也看よ、行にも也看よ、應酬にも也看よ。看不得の處、展轉反覆にして看よ、看來り、看去らば、自ら悟底の時節あらん。

問を承る、雜念起る時、如何が對除せんと。雜念亦多種あり。若しくは公家に應酬し、若くは婚男嫁女、若くは治生産業、如來云はく、皆實相と相違背せずと。豈斷除すべけんや。此れ正に是れ法性應用、千差萬別、妙覺出沒す。如來所謂る幻を除く者を以て諸幻を變化し、而して幻衆を開く。彼幻と觀る者。幻に同じきに非ざるか故に、皆是れ幻なるが故に、幻相永離る、頭頭妙

大休亦出陣の將士を教化す

道、處處解脱、若し是れ私心曲念ならば、物を害し、己を利す、此等の雜念起る時は、却て打疊せざるべからず。

問を承る。雜念止まる時、什麼の處に在りて用心せんと。前に所謂る本來を悟得せば、雜念便ち是れ本來自受用三昧なり。便ち雜念の中に就いて輕輕に冷看するも、亦力を著くるを要せず。亦他を打併するを要せず。他に聽るす自起自滅は空中の華の如し本實性なし。空より生じ、空より滅す。久久に便ち般若の智慧を見ば、觸目全く彰はれん。佛云はく、湯の氷を消す如く別に氷ありて氷消ゆと知る者無し。我を存し、我を覺するも、亦復た是の如し。

大休の會下に問訊して、法語を與へられた者も亦多かつたが、大休は彼等を策勵し、送行の詩偈を與へたこともある。

送民部六郎奉使鎭西

馬蹄得意疾如飛、閫外通傳樞密機、奇策良籌功業就、松間時聽凱歌歸、

建長寺住持を辭して西歸を請ふ

弘安四年閏七月元の大軍が潰敗の後幾もなく子元は我事亦了れりとなし、建長寺住持を辭して西歸しようとした。

辭檀那求歸唐

故園望斷碧天長、那更衰齡近夕陽、補報大朝心已畢、送歸太白了殘生、

大朝に補報して心已に畢る、太白に送歸して殘生を了らしめよと云へるは、子元が西歸の主意であらう。子元が我邦に盡せる心事が察せらるゝでないか。時宗たる者この言を聞いては、益優遇せねばならぬ。

嘸に時宗は鎌倉に一大禪林を造營しようとし、蘭谿の示寂により中止したのである。その後軍國多事の間にも、この發願を成就しようとして、木匠を遣はして徑山の諸堂宇の結構を調査せしめ、遂に建長寺の西北の地を相して大工事を

**圓覺寺の建立**

起し、着着として經營してゐた、弘安五年に至つて落成し、諸堂宇の結構等全く宋の大禪林の規模に倣ひ、大に整備したものであつた。乃ち瑞鹿山圓覺寺と號し、特に子元を請した。こゝに至り子元は西歸の思念を翻し、時宗の請に任せ、開山第一世となつた。

**開堂拈香**

同年十二月八日に子元自ら大衆を率ゐて開堂の盛典を擧行し、大に一門の宗風を宣揚した。法語に日本語を交へ用ひて、大衆をして諦聽感嘆せしめたと云はれてゐる。

拈香して曰はく、

一、此一瓣香は、根は忠孝の地に萠し、枝は般若の林に生ず、爐中に熱向して、恭しく

今上皇帝聖壽無疆を祝延をし、洎ひ文武寮寮咸く祿位に臻らんことを、

**圓覺寺幕府の祈禱所となる**

**幕府寺領を寄進す**

次に拈香して曰はく、

此一瓣香は、根塵を脫落して、更に葉枝無く、清淨彌滿し、一切に墮せず。爐中に熱向し、見座道場毘盧遮那佛十六諸佛、洎及び圓覺會上十二菩薩、觀世音菩薩、一切菩薩、護法天龍、一切聖衆に供養したてまつる。

當日大雪降り、大衆は開堂の祥瑞となし、相喜んだことが傳へられてゐる。

翌六年七月、時宗は當寺を以て幕府の祈禱所となし、領地を寄附しようとし、乃ち同日その申請により、幕府は敎書を下し、越前の山本莊を寄附し、次に尾張の富田莊、富吉加納、上總の畔蒜南莊內龜山鄉を寄附すること、なつた。時宗これを子元に通知して自ら感悅した。

圓覺寺事爲將軍家御祈禱所、任相模國司申請、所被寄進尾張國富田庄、幷富田加納、上總國畔蒜南庄內龜山鄉也、者依仰下知如件、

子元感喜して大衆を訓戒す

弘安六年七月十六日　駿河守平朝臣業時（花押）

以圓覺禪寺申成將軍家御祈禱所候、仍御教書進之、食輪已轉、法輪常轉、必及龍蓏之期、感悅之至、不知所謝、委細期面拜、恐惶謹言、

七月十八日　時宗

圓覺寺方丈侍者

子元は時宗の盛意に對して大に感激し、卽ち書を裁して送進し、その恩遇を深謝した。

祖元端肅皇悚申覆、玆承鈞汗緘至、圓覺供僧田產將軍公文、及鈞座備申文狀共三紙、一一燒香覽訖、山懷甚爲法門爲賀、誠是國家及大將軍太守千年植福之基、萬刼作佛之本、老懷預此鉢飯霑惠多矣、佛天照臨非小事、謹此申謝、來日參詣府墀、而既不宣、祖元端肅、皇皇申覆、

（鎌倉圓覺寺所藏）　狀書宗時條北

七月十八日

且つ普說して、大衆を訓誡策勵してゐるが、一一子元の肺肝より吐出する言ならぬはない。

老僧大唐より此に來り、仰いで大檀那の眷愛を蒙る。深く老僧是れ佛法本色の人なるを知り、特に此方の伽藍を建立し、亦佛法を本國に流行せんと欲す。大宋二十年間、前輩去りて後、老僧頗る衲子に歸せられ、人をして工夫を做さしむるに、別の公案を以てせず、只だ卽心卽佛の四字を以て、學者に布施す。中間下語多く、甚だ吾意に契はざるものあり。我者裏紅爐の如く相似たり。紅焰を皷起し、儞の蚊蚋の捧泊することを容さず。豈一毫の情識を其間に容著せんや、若し是れ獨脫底の人ならば、或は言語あり、或は言語なし、或は道理を帶び、或は道理を帶びず。香象の海を渡るに、流を截りて而して過

くるが如くならん。此公案を透過せば、一大藏教百千の法門、那裏か透らざる底あらん。我れ大唐に在る時、院大ならずと雖、位高からずと雖、信を人に取り、却りて大方の下に在らず。老僧日本の招に赴くに臨みて、多く衲子あり、衣を牽き泣を垂る。我れ諸人に向うて道ふ、我れ三兩年にして便ち回らん。煩惱なることを用ひざれと。吾れ今諸兄のために說く、諸人老僧を見て却て等閑となし、甘んじて悠悠として歲月を度り了る。老僧大唐多少の好兄弟を撇掉し了りて、諸兄の眼目を來り開かんことを要するを知らず。中間或は一個半個あり。直下に生師子兒の哮吼し、壁立萬仞なるが如くならば、方に佛祖のために屈を雪ぎ、方に我數萬里遠來の意に稱ふべし。檀那此道場を建て、堂宅高廣にして、四事の供養種種妙妙なり。今日莊田の文字を以て、老僧に布施し、千年萬古、衲子を供養す、且く道へ、檀那の意何れにか在る、諸兄三條椽下、七尺單前、內より放出せず、外より放入せず。透去せしむることをなせ。若し一向前の如く肯て坐禪せず、肯て諷經せず、肯て堂に赴かず、粥飯を喫し、寮舍に橫眠倒臥し、赤身露體にして、袈裟を搭けず、鉢盂を展べず、懶墮狼藉ならば、年頭より直に年尾に到るまで、何の補ありて檀施に報ぜん、諸兄頭を回さゞるべからず、若し幾人か參請して眼目開き、老僧の意に契得する者あらば、亦以て我思鄕の念を銷し、我法の爲め人を求むる心を慰すべし。千萬勉力せよ、知事たる者、耆舊たる者、須らく當さに佛祖の頂を以て、額頭上に在るべし、才に常住の金穀と云ふも、便ち是れ佛の倉庫なり。一毫も狼藉ならば、一毫も管帶し及ばず。便ち是れ佛身の血を出し、佛面の金を削る、罪過懺悔を容さず、須らく當さに出を量り入るを度りて樽節重輕すべし。莊頭は須らく正人を得べし。己の私に順ひ、

建長圓覺の二寺を兼ぬ

所愛に溺れ、その狼貪を縱にし、常住を蠹損すべからず、遷に相蒙茫して、一言を發せざれば、常住欠缺し、百端借貸し、檀那を吵聒す、檀那之を見ば、只厭煩せられん。

七年三月幕府は閑日齋料米百石を寄進し、尋いて菜園の地を寄進した。

已に建長寺に竝んで圓覺寺新に成り、二大伽藍巍然として聳へ、子元は二寺を兼ねて住持となり、盛德關東の平野を蓋へる狀況である。

當時圓爾京都に寂し、門弟相尋いで東下し、子元の一門益繁榮し、日夕接化に忙殺せられてゐた。子元が法語等を與へたる者を見るに、敎僧あり律僧あり、縉紳あり、將卒あり、婦女あり、語錄に名を傳ふる者、一百餘人に及んでゐる。

殊に北條氏の一族、及び幕府の將卒は、皆相競うて、示敎を請ひ、方丈は常に彼等を以て充されてゐた。

（京都帝國大學所藏鎌倉時代繪卷に據る）

（滋所寺覺圓縣川奈神）　狀書元祖元子師禪光佛

風懷を吟詠す

時宗の卒去を悲痛す

退院上堂

子元は時宗の禮遇に感激し、決意して日本に終らんとし、常に四來の道俗を接得するを以て事とし、時に事物に托して風懷を詠じてゐた。屏風の海の圖に題した詩二首は、殊に自ら興趣を遣つたものであらう。

題屏風海圖

爲愛扶桑水國清、烟霞爲屋水爲城、十洲三島蓬壺裏、添得龐眉一老僧、

碧天連水水連天、秋色依依上釣船、我亦不知身是客、數聲寒雁斷雲邊、

然るに弘安七年四月、時宗の卒去するに至り、大に悲痛し、戀戀として追慕して已まず、その吊偈に、退隱の意を漏らし、幾もなく圓覺寺の住持を辭した。

退院上堂

前年臘月住此山、今年臘月離此山、一去一來無定度、碧天雲外不相關、

大衆擧つて强請すれども再び出でず。我事了れりとなし、自悼偈七首を作つ

て、最後の決意を示した。

自悼偈七首

頹然齒豁又頭童、一息青山萬劫空、後二千年雲水客、是誰來此弔孤踪、
爲法求人日本來、珠回玉轉委荒苔、大唐沈却孤節影、添得扶桑一掬灰、
的的由來沒可名、水中漚沫鏡中形、劫初田地誰爲主、滄海波濤夜不停、
七尺稜層疥狗身、一堆紅燄作飛塵、白雲流水寒溪曲、青草年年補燒痕、
本無生滅是眞常、暫出閻浮借路行、更聽老夫眞實說、一函白骨亂縱横、
灼然悲觀示無窮、是處青山有古松、有舌不談無舌句、朝朝呵雨又呵風、
學翁睡熟正悠哉、花木堂前萬象開、畢竟分身誰是伴、牛頭去了馬頭回、

それで九年九月三日建長寺の方丈に在り、手書し諸方に辭別し、云はく、

一切行無常、生者皆有苦、五陰空無相、無有我我所、

乃ち一弟子あつて側に侍し、師の滅後舍利あるかと問へば、子元偈を擧す。

遺偈

諸佛凡夫同是幻、若求實相眼中埃、老僧舍利包天地、莫向空山撥冷灰、

晩に及んで沐浴し、淨衣を着し、常の如く言笑し、人定まるに至つて筆を索めて偈を書し云はく、

來亦不前、去亦不後、百億毛頭獅子現、百億毛頭獅子吼、

晏然として寂した、壽六十一、臘四十九である。諸弟子闍維し遺骨を建長寺山の麓に瘞り、常照塔を築き、正續院を置く。後に勅諡佛光禪師と云ふ。

子元示寂のことが故國に傳はり、諸禪刹の禪僧が皆炷香して吊偈を賦した。子元の德望が察せらるゝのである。

故國禪僧の吊偈

偈悼無學和尙老師　天寧可擧

隣國來招意氣豪、乘桴浮海去飄飄、道行異域春風暖、名播諸方夜月高、朋友信音疎往返、死生魂夢隔波濤、君今西邁無遺恨、嗣續吾家有俊髦、

法叔無學和尙示般涅槃于日東、展炷無繇、賦此以旌敬意、

淨慈如芝

憶師載道入扶桑、末後全機爲學揚、牢堵倚空光寂寂、風颯奏曉語琅琅、雲凝徑竹寒篩影、月曬庭梅暗度香、謂滅度時非弟子、不知直下幾聯芳、

子元我邦に來てより七年の間、鎌倉に在つて宗風の擧揚に一身を捧げたもので、その法益德化極めて著大であつた。法嗣十餘人を出だし、高峰顯日の下、尤も繁興し、夢窓疎石等に依つて天下に滋蔓することゝなる。

子元の後建長寺には葦航道然入つて住持となり、圓覺寺には大休正念入つて住持となり、次に鏡堂覺圓入つて住持となる。鏡堂は後に京都に上り、建仁寺住持となつて大に聞え、遂に同寺に寂す。

【佛光國師語錄】三　老僧雖在大唐、日本兄弟同住者多、亦不曾相交、但知有大國佛法之盛、亦不問子細、十五六年前泉古澗歸自本國、開壽相會、他方從此同、備言最明寺殿弄捨世榮、身披法服、後臨入寂之時、儼然坐脫、且言大將軍待我再回、某稱彼處王臣崇重佛法如此、何不再去、云云、

【夢中問答】上　建長寺ノ始ニハ、日中ノツトメハナカリケリ、蒙古ノ襲來シ時天下ノ御祈ノタメニ、日中ニ觀音經ヲヨミタリケル、ソノマヽニシツケラレ今ハ三時ノツトメトナリタリ、

【空華日工集】三　日本號日中諷經者、爲外國敵來襲、昔建長寺始讀法華普門品、自爾以來每寺或讀金剛經、或法華圓覺等經、

# 第十章　五山十刹

支那の五山十刹の起源

支那の五代の際、吳越王錢鏐が江南地方の敎寺を改めて禪寺となし、南宋に至つて江南地方の禪寺が大に興隆した。寧宗の時史彌遠の奏言により、始めて禪寺の等級を制定し、天竺の五精舍（鹿苑祇園竹林大林那爛陀）十塔所（頂塔牙塔齒塔髮塔爪塔衣塔鉢塔錫塔瓶塔輿塔）に准じて、五山十刹を設置したと云ふことが傳へられてゐる。

南宋の寺院制度

南宋の佛敎の興隆は、國家的意義を帶びてゐたもので、官府は諸大寺を經營し管理した。乃で諸禪寺の大小に依つて等級を制定し、諸禪僧が住持となり、漸次に等級を追うて昇進すること、したものである。此の如くにして五山十刹が設置せられたものである、その禪寺は江南地方の大刹に限られたものであつて。一面は皆國家の祈禱所であつた。

五山

五山

第一　杭州臨安府徑山　興聖萬壽禪寺
第二　杭州臨安府北山　景德靈隱禪寺
第三　明州慶元府太白山　天童景德禪寺
第四　杭州臨安府南山　淨慈報恩光孝禪寺
第五　明州慶元府阿育王山　廣利禪寺

十刹

十刹

中竺　杭州臨安府　天寧萬壽永祚禪寺
道場　湖州烏程縣　護聖萬壽禪寺
蔣山　建康上元府　太平興國禪寺（後に靈谷寺と改め號す）
萬壽　蘇州平江府　報恩光孝禪寺

我邦の五山十刹の起源

雪竇　明州慶元府　資聖禪寺（一に瀑頂寺と號す）
江心　溫州永嘉縣　龍翔禪寺
雪峰　福州侯官縣　崇聖禪寺
雙林　婺州金華縣　寶林禪寺
虎丘　蘇州平江府　雲岩禪寺
國清　台州天台縣　天台山敬忠禪寺（一に五峰山景德國清禪寺と號す）

然れば南宋の寺院制度の一部として五山十刹が設置せられたのである。幕府は彼事實を模倣しようとしたものであらう。我邦の五山十刹は、北條時賴が設置したものと云はれてゐる。併し乍ら當時固より五山十刹の數へらるべきものがない。時賴はかの事實を模倣しようとし、建長寺を建立したものであらう。然れば五山十刹の端を開いたものである。その後を繼いで時宗が圓覺寺を建立した。是等二寺は、共に徑山の萬壽寺の規模に依つたものと云はれてゐる。二寺の建立が一大新事實であつたことは云ふまでもない。

建長寺の建立

既に建仁東福の二寺が京都に建立せられてゐた。併し乍ら是等の二寺は當時禪寺でなかつた。建仁寺は延曆寺の別院とせられ、圓密禪の三宗が併置せられてゐた。東福寺は八宗の學苑と云はれてゐたもので、灌頂堂等が設置せられてゐた。

建長寺の鐘銘

然るに建長寺は諸堂の配置設備が全然宋の大禪林に依つたもので、宋の禪僧蘭谿道隆が入つて住持となり、宋の大禪林の清規を施行したのである。

建長七年時賴が發願して建長寺の洪鐘を鑄造せんとし、一千人の緣會を結び、幾もなく落成し、蘭谿は洪鐘の銘文を撰して、時賴の發願の事實を記し、末に建長禪寺住持宋沙門道隆謹題と署した。この洪鐘の銘文は、この署名の事を以

て、殊に注目せらるべきものである。

宋には教寺禪寺と云ふ別があつたが、我邦に禪寺と云ふものがなかつた。實に建長寺が始めて禪寺と公稱せられたものである。

教寺禪寺の別

當時佛教の中心地である京都では、天台眞言等の諸宗が教權を持し、宗閥を擁してゐるから、決して禪寺と云ふものが認許せられない。この際天台眞言等の諸宗の勢力も鎌倉幕府の下に及び難いものであつたことを證明してゐるのである。

鎌倉の諸寺の建立

然るに鎌倉幕府が開かれて後、諸大寺が建立せられ、率ね天台眞言等の祈禱所であつたが、禪宗の修行所が建立せらるゝに至る由來を說明せねばならぬ。

諸寺の區別

我邦の諸寺は政治的に區別すれば官寺公寺私寺に分たれ、宗教的に區別すれば、祈禱所菩提所修行所に分たるゝのである。官寺には勅願寺定額寺の二種あるが、率ね祈禱所であつて、罕に菩提所修行所がある。公寺私寺は率ね菩提所であつて、罕に祈禱所修行所がある。

飛鳥奈良朝時代の諸寺は政治的には官寺であつて、宗教的には祈禱所であるものが多く、平安朝時代鎌倉時代の諸寺には、政治的には官寺私寺であつて、宗教的には祈禱所菩提所であるものが多い。殊に鎌倉時代の諸寺には私寺で菩提所であるものが極めて多いのである。

諸寺の設備

諸寺には皆佛法僧の三寶を安置する設備がなければならぬ。飛鳥奈良平安朝時代の完備せるものには、金堂塔婆講堂經藏鐘樓鼓樓僧坊食堂中門大門等がある。鎌倉時代の寺の完備せるものには、宋の禪寺の規模に依るものが、自ら異ふことゝなる。即ち佛殿法堂僧堂厨庫浴室西淨山門等がある。

七堂伽藍

古來眞言七堂伽藍、禪宗七堂伽藍と云ふことが言ひ傳へられてゐる。眞言七

堂伽藍と云ふは、法相天台眞言等の寺の完備したものを稱し、禪宗七堂伽藍と云ふは禪宗の寺の完備したものを稱するのである。卽ち敎寺禪寺の各完備したるものを併へ稱したものである。

敎寺禪寺の建築設備の相異

乃で敎寺禪寺の建築設備等の相異點は、極めて多い。併し乍ら最も著大なる相異點は、敎寺の建築設備は、佛寶法寶を安置することを主要とし、禪寺の建築設備は僧寶を安置することを主要としてゐるのである。

榮西と壽福寺

敎寺の建築設備は、率ね祈禱所菩提所の意義に副ひ、禪寺の建築設備は率ね修行所の意義に副ふものとなつてゐる。

榮西が京都で禪宗を首唱して禍難に罹り、鎌倉に下り賴家等に請せられて壽福寺に入つた。同寺は岡崎義實が源義朝の冥福を薦修して建てしたものであつて、未だ一寺の設備をなしたものでなかつた。後政子等の發願によつて、大に工事を起し、諸堂を修營し、榮西に附せられた。榮西は同寺に圓密禪の三宗を併置して兼修した。尋いで蘭谿が鎌倉に入つて先づ壽福寺に入つて寓し、次に時賴に請ぜられて粟船の常樂寺に入つて寓した。同寺は元北條泰時の持佛堂であつて、泰時が卒去し、同所に葬られた。後法印道禪が住し、泰時の冥福を薦修してゐた。當時粟船御堂と稱し、未だ一寺の設備をなしたものでなかつた。

蘭谿と常樂寺

蘭谿が入つて寓し、始めて禪宗を傳持した。時賴の發願によつて、大に工事を起し、諸堂を修營して、蘭谿に附せられた。蘭谿は同寺の住持となり、禪林の清規を施行することゝなつた。これが鎌倉の禪寺の起源であると云はねばならぬ。

禪寺の起源常樂寺の清規

蘭谿が常樂寺に掲げた清規は次の如くである。

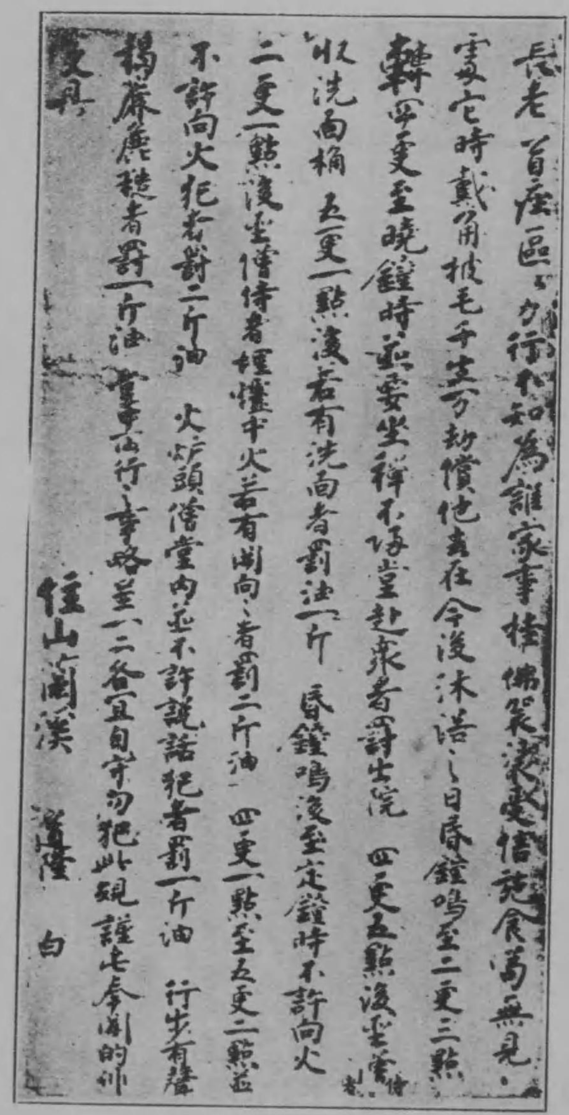
光陰有レ限六七十歳、便在二目前一、苟過二一生一、灼然難レ得レ復レ本、既挂二佛衣一之後、入二此門一來、莫レ分二彼此之居一、各當レ行二斯道一、儻以二粟船

上殿二爲レ名、晝夜恣レ情、於戲非二但與レ俗無レ特、亦乃於レ汝何益、今後本寺主者、既爲二衆僧之首一、當下依二建長矩式一而行上、晝則誦經之外、可レ還二僧房中一、客前坐禪上、初夜之時、以香爲二定式一、領レ衆坐禪、二更三點可レ擊レ鼓、房主歸衆方休息、四更一點、仍復坐禪、至二閑靜時一方入レ寮、夜中不レ可二高聲談論一、粥飯二時、竝須二齊赴一、不レ可二先後一、今立レ此爲二定規一、不レ可二故犯一、若有下恣レ意不レ從レ之者上、申二其名一來、可レ與二重罰一、住山道隆

この清規は蘭谿が建長寺に遷住して後、常樂寺に掲げたものであらうが、これを以てその常樂寺に住してゐた時に、實地に施行してゐたものであることが察知せらるゝのである。

建長寺の大工事が、三年に亘つて漸く落成し、蘭谿が開山第一世となるに至

大覺禪師蘭溪道隆筆清規（神奈川縣建長寺所藏）



り、始めて禪林の施設が完備したのである。

當時建長寺に掲げられた清規の一部が傳はつてある。

長老首座區區力行、不レ知二誰家事一、挂二佛袈裟一、受二信施食一、苟無二見處一、他時戴角披毛、千生萬劫、償他去在今後、

沐浴之日、昏鐘鳴至二二更三點一、轉四更至二曉鐘時一、竝要二坐禪一、不レ歸レ堂、赴レ衆者、罰出院

四更五點後、聖僧侍者收二洗面桶一、五更一點後、若有二洗レ面者一、罰油一斤、

昏鐘鳴後、至二定鐘時一、不レ許レ向レ火、二更一點後、聖僧侍者埋二爐中火一、若有二開向之者一、罰二斤油、四更一點至二五更二點一、竝不レ許レ向レ火、犯者罰二二斤油一、

火爐頭僧堂內並不レ許二說話一犯者罰二一斤油一、
行步有レ聲揭レ簾麤粗者、罰二一斤油一
堂中所行之事略呈二一二一各宜二自守一勿レ犯二此規一謹此奉聞的作更
具　住山蘭谿道隆白

凡遇レ浴日、堂爲レ不レ可二喧鬨一、世境知客在二浴院中一高□、彼時浴主禁約、以二耆蕉之名一、令二渠息二其鬨鬧一、知客猶增二忿怒一、却以飲二毒藥一爲レ名、揚二其家醜一、浴主況有二不正之事一、何因鬨諍、始出二斯言一、飲レ毒之時、便申二公界一、是知客之正理、因レ事方言、此乃世境之咎、且從二輕罰一油三斤、確志浴主前二公界人前一、以二服藥一爲レ名、此亦强說二道理一、其過甚重、從二輕罰一油五斤、如不レ伏レ理、二俱出レ寺、　道隆

當時建長寺には極めて嚴肅に禪林の淸規が施行せられてゐたことが察知せらるゝのである。一切の行事が諸寺の間にあつて新面目を呈し、大に注視せられたものであらう。兀菴普寧が鎌倉に入り、建長寺に住するに至り、益〻大禪林となつた。

最明寺の造營

時賴が最明寺を建造して隱棲したが、同寺は固より一寺の設備をなしたものでなかつた。併し乍ら時賴は常に同寺に坐禪してゐた。時賴が卒去した後、時宗は修營して禪興寺と號し、漸く禪林の設備をなすに至つた。

禪興寺を改め號す

大休西磵と壽福寺禪興寺

大休正念西磵子曇が鎌倉に入り、壽福寺禪興寺に住するに至り、是等の諸寺は全く禪林となり、諸堂が整備することゝなつた。

子元と建長寺

尋いで子元祖元が鎌倉に入り、建長寺に住するに至り、同寺は益興隆し、入宋の諸禪僧が四來して、各〻禪林の諸役に就いて奮勵するに至り、大禪林の面目が發揮せられた。

蘭谿が始めて鎌倉に入つて後三十餘年にして、子元が鎌倉に入つたのである。然るにこの年間に鎌倉の諸寺の狀況は大に變遷し、判然として敎寺禪寺の別が見らるゝことゝなり、禪寺は益〻興隆繁榮した。

**圓覺寺の建立**

圓覺寺の大工事落成し子元が開山第一世となり、一山大衆を接得するに至り、大禪林の興隆繁榮は大に人目を驚かしたものである。

**建長圓覺二寺の建立の主意**

建長寺圓覺寺の二寺は修行所の意義を發揮したものであつた。

併し乍ら二寺の建立の主意に依れば、一面に祈禱所菩提所の意義がある。これが大に注意せらるゝのである。

建長寺の建立の主意は、山門の額に依つて掲示せられ、佛殿の虹梁銘に依つて說明せられてゐる。卽ち山門の額には建長興國禪寺とあり、佛殿の虹梁銘にはその意義を發揚し、本願主北條時賴開山蘭谿道隆が各署名してゐる。

（上間）今上皇帝千佛垂手扶持、諸天至心擁護、長保二南山壽一、久爲二北闕尊一、
同胡越於一家、通三車書於萬國一、正五位下行相模守平朝臣時賴敬白
（下間）伏願三品親王征夷大將軍、干戈偃息、海晏河清、五穀豐登、萬民康樂
法輪常轉、佛日增輝　建長五年癸丑十一月五日住持傳法沙門道隆
謹言

建長寺の洪鐘の銘にこの善利に因り、上親王を祝し、民豐に歲稔に、地久しく天長しへならんと云へるは、建長寺の建立の主意に副ふものである。

圓覺寺の建立の主意は開山子元が常に顯說してゐる。

佛殿の額を掛けて曰ふ、

解脫門開正覺場、十虛無際露堂堂、毘盧藏海乾坤濶、樓閣門前白晝長、
こゝに我大檀那相摸元帥性天廓徹、功行雙全し、大信力を具して佛知見に入

り、一彈指の間、華嚴法界を湧出し、無住相より遮那妙身を捧出し、塵塵刹刹寶印光寒し、物物頭頭妙莊嚴城なり。回機轉位、全主全賓、一會の靈山。手を擧して、

只這れ便ち是れ。只今日高く牌扁を掲くるが如きは、何の祥瑞かある。

蕩蕩金光動霄漢、萬年千載鎭坤維、

第九章に說明した如く將軍家の祈禱所としたものなるが、時宗は常に戰死の士卒の冥福を薦修しようとして、莊嚴供養に意を用ひたものである。

建長圓覺の二寺と北條氏の家風

二寺は共に結構宏壯雄大なるものである。併し乍ら決して華麗優美なるものでない。北條氏は大に資財を投用したものであるが、質實簡素の家風を失はず二寺共に板葺草葺を用ひてゐることが大に注意せらるゝのである。

奈良京都の諸大寺の結構に比較すれば、鎌倉の諸大寺は粗樸なるものである

鎌倉の禪林の興隆

我邦の杭州

建長圓覺の二寺の建築は、自ら鎌倉武士の面目を發揮してゐるものと見らるゝのである。

それで二寺が武士の精神修養の根本道場となつたものである。

當時鎌倉に建長寺圓覺寺を首とし、壽福寺、禪興寺等あり。尋いで大慶寺、法源寺、淨林寺、淨智寺、東勝寺、東慶寺、靈山寺等がいづれも一方の禪林であつた。是等の諸禪林には、內外の諸禪僧等が入つて住し、各宗風を擧揚した卽ち壽福寺、禪興寺、大慶寺には、大休正念、西磵子曇、義翁紹仁等が入り、法源寺には無象靜照が入り、淨林寺には葦航道然が入り、淨智寺には南州宏海が入り、東勝寺には桑田道海、約翁德儉等が入り、相互に法化を相助けてゐた。

、こゝに至り鎌倉は我邦の杭州であつた。禪宗の根本地である。五山十刹の事實が見らるゝのであつた。

鎌倉の諸禪林の事業

禪籍の印行

鎌倉の諸禪林が興隆し、漸く宗風を諸國の地方に流傳した。その著しい事實は、禪宗の書籍を印行したことである。

實は攝津三寶寺の大日能忍が始めて禪宗の書籍を印行したのである。卽ち宋の拙菴德光から贈られた潙山の大圓禪師警策を版刻した。併し乍らその後この事業を繼續せられなかつた。

鎌倉の諸禪林で先づ兀菴大休の語錄が印行せられたが、兀菴は西歸するに方り、自らその木版を破毀したことが傳へられてゐる。

北條時宗は發願して、『圓覺經』等を版刻して供養したもので漸く盛に書籍が印行せられた。この際の禪宗の書籍が印行せらるゝことゝなつた。

弘安六年に北條顯時が發願して黃檗希運禪師の『傳心法要』を印行し、大休の跋を附して流敷した。尋いで同十年六月に古倫慧文が衆緣を勸募して『禪門寶



訓集』を印行し、大休の序を附して流敷し木版を建長寺の正續菴に施入した。同年九月に寶積淑惠等が先師宴海の發願を繼續して『傳法正宗記』を印行した。

當時京都の諸寺では、大に盛に諸經論が版刻印行せられてゐた。諸經論筆寫の功德が信仰せられてゐた如く。版刻の功德が信仰せられたものである。それで殊に眞言宗の經論の版刻印行せられたものが多かつた。

畢竟諸經論を版刻印行する功德が信仰せられたものであるから、是等の諸經論を版刻印行しても必ずしも傳播流敷して、諸人が、研究領會することを期待したものでないと云はねばならぬ。

然るに禪宗の書籍の版刻印行せらるゝことは、專らその書籍を傳播流敷して、諸人の研究領會する便宜を與へようとしたものである。『傳心法要』の跋に、版刻印行の主意を辨明し、この集が日本に流入し、北條顯時が公事の餘暇に愛讀

し遂に唐本を以て模刊し、廣く傳へ、未だこの宗門を信ぜざる者に示さうとするものであると云ひ、『禪門寶訓集』の序に、この書が必ず禪林を裨益すべきものであると云ひ、古倫の識文に、廣布流通し、惟古德の先言往行を傳ふるのみでなく、自ら夙志に酬ゆる所があると云へるは、大に意義あることであると云ねばならぬ。

**建長寺の沿革**

建長寺には、蘭谿道隆の後、兀菴普寧、大休正念、義翁紹仁、無學祖元がいづれも宋の禪僧で、相次いで住持となり、尋いで葦航道然が我邦の禪僧で、始めて住持となり。葦航の後鏡堂覺圓、痴絶空性、桑田道海が相次いで住持となつた。

**一山の晋山式**

永仁元年四月十三日に建長寺火あり、諸堂が大半災に罹る。正安元年十二月七日元僧一山一寧入つて住持となり、晋山式に上堂して曰はく、十方壁落無く、四面亦門無し。彈指一下して曰はく、者裡入得す、別に是れ乾坤、と。當時の狀況が想見せらるゝのである。

**一山の事歴**

一山一寧は、元の台州の人、俗姓胡氏である。得度の後、諸敎寺に入り、『法華經』等を研究し、轉じて天童山に登り、簡翁士敬に就いて禪を問ひ、深く推服し、簡翁に隨侍すること二年に及び、後育王山に登つて、諸禪德を問訊し、遂に痴絶道冲の法嗣頑極行彌の弟子となり、法信を受けて後、天台雁蕩等の諸禪林を歴遊し、至元二十一年、四明山祖印寺に住し、十年に及ぶ。同三十一年明州慶元府の補陀山に遷り住し、大に宗風を擧揚し、法化海岸の諸地に普及するに至る。

元は大敗の後、別に一高僧を派遣して、日本を勸誘しようとした。乃ち慶元府は一山一寧を推擧し、その任務に當らしむることゝなつたもので、一山はそ

元の使命

の自から逃るべからざるを知り、遂に命を受くるに至つた。大德三年明州を出發し、太宰府に到着した。我正安元年である。卽ち飄然として鎌倉に入つた。

一山は初めより政治上の使命を傳へようとせず、自ら宗教上の使命を全うしようとしたものであつた。然るに幕府は元の深意を探査し、一山を伊豆の修禪寺に編置したが、一山は日夕禪誦に耽つて他意なかつた。乃ち鎌倉に迎へられて禮遇せらるゝことゝなつた。遂に執權北條貞時等專使を遣はし建長寺に請した。一山大に感激して曰はく、此身心を塵刹に奉ず、是れ則ち名けて佛恩を報ずとなす、と。偈を擧して大衆に示した。

靈山佛法付王臣、今日扶桑話又新、一道恩光徧塵刹、東溟天曉湧金輪、

滿山の大衆を接得して大に法化を敷き、全然元の使命を棄擲し、我邦に歸化するに至つた。

定額寺に列せらる

圓覺寺の沿革

諸寺の禁制條目

一山の後、西磵子曇、無隱圓範、相次いで住持となり、次に南浦紹明が京都の嘉元寺より轉じ入つて住持となつた。

延慶元年九月伏見上皇勅額を建長寺に賜はり、十二月二十二日勅して定額寺とせられた。

圓覺寺には子元祖元の後、大休正念が住持となり、弘安十年十二月二十四日に火あり、尋いで鏡堂覺圓が住持となり、正應元年十二月十二日に再び火あつて諸堂が燒失した。同二年五月に入道了義が寺領下總國毛成草毛の二村を寄附し、永仁元年六月二十五日に執權北條貞時が造營料尾張國篠木莊を寄附し、再建の經營をなし、幾もなく落成した。

永仁二年正月貞時諸寺の禁制條目を制定して嚴行した。その各條目に依つて開山以來の清規が漸く廢弛せんとしたものであることが判知せらるゝのである。

禁制條々事

僧衆不レ帶二兎丁一事、

禪律僧侶夜行他宿事、

若有二急用一之時者、爲二長老之計一可二差副一也。

比丘比丘尼、竝女人入二僧寺一事、

但許二二季彼岸中日、二月十五日、四月八日、七月盂蘭盆兩日一、此外於二禪興寺一者、每月廿六日、於二圓覺寺一者、每月初四日可レ入也、

四月八日花堂結構事、

戒臘碑結構事、

僧侶横二行諸方一採レ花事、

僧衆去所不分明出門事、

延壽堂僧衆出行事、

僧侶着二日本衣一事、

僧徒入二尼寺一事、

四節往來他寺作禮事、

僧衆遠行之時送迎事、

右條々於二違犯之輩一者、不レ論二老少一、可レ令レ出レ寺也、若於レ有二子細一者、可レ揚二申其名一之狀如レ件、

永仁二年正月日　　貞　時（花押）

桃溪德悟、葦航道然、西澗士曇が相次いで住持となつた。正安三年八月に貞時發願して梵鐘を鑄造し、住持西澗士曇銘を作る。翌乾元元年十月一山一寧建長寺より轉じ入つて住持となる。

圓覺寺制符

嘉元元年二月、貞時再び禁制條目を制定して嚴行した。蓋、清規が廢弛せんとしたことが判知せらる。殊に僧徒出門女人入寺行者人の帶刀等を禁制し、犯す者は、寺門を追放すとあるは、寺門の風儀が判知せらるゝのである。

圓覺寺制符條々

一、僧衆事不レ可レ過二二百人一、

粥飯事、臨時打給一向可二停止一之、

寺中點心事、不レ可レ過二一種一、

寺參時、扈從輩儲事可二停止一之、

小僧喝食入寺事、自今以後一向可二停止一之、

但檀那免許非二禁制之限一、

僧徒出門女人入寺事、固可レ守二先日法一、若違犯者可二追放一之、

行者人等帶刀事、固可二禁制一之、若有二犯者一可二追出一之、

右所定如レ件、

乾元二年二月十二日　沙　彌（花押）

亀山上皇叡慮を禪宗に傾け給ふ

延慶元年九月伏見上皇勅額を賜はり、十二月二十二日定額寺とせられた。

こゝに至り建長圓覺の二寺が共に官寺に列せられたものである。

然るに亀山上皇が無關普門、規菴祖圓を勅召して、叡慮を禪宗に傾け給ふに至り、宗風漸く京都に盛興することゝなる。上皇は禪林寺の南に一院を修營して、親ら臨御あり、日夕宗乘を參究し給ひ、遂に勅願あり、南禪寺を建立し、禪林の設備をなし給ふ。こゝに至り、始めて京都に禪寺が見らるゝことゝなり、諸禪僧が來會することゝなつた。

禪宗中心地の移動

乃ち禪宗の中心地は、漸く京都の方に遷移する狀況である。一山が勅召を拜

京都の宗風

諸國の地方の禪林

鎌倉諸禪林の萎微

して京都に上り、南禪寺に入つて住持となるに至り、忽ち禪宗の勢力を加へた。

この際、嘉元寺住持南浦紹明の法嗣絕崖宗卓、宗峯妙超等が京都に留任し、漸く一門をなすことゝなつた。

諸國の地方には、筑前の聖福寺、承天寺、崇福寺、豐後の萬壽寺、紀伊の興國寺、越前の永平寺、三河の實相寺、駿河の清見寺、遠江の平田寺、武藏の東漸寺、上野の長樂寺、下野の雲巖寺、能仁寺、陸奥の圓福寺等が漸次に禪林の設備をなすこととなり、いづれも一方の道場となるに至つた。

鎌倉の諸禪林は清規益〻廢弛し、大衆が爭鬪して刃傷する者あるに至り、幕府は數〻禁制の條目を下して誡飾したが、諸禪林の風儀は益〻失墜し、滔滔たる大勢を如何ともせられなかつた。

建長圓覺の二寺が幕府の奏請により官寺に列せられた後、鎌倉の諸禪林の宗風は萎微沈滯し、全然言ふに足らないものであつた。

宗風の感化

併し乍ら鎌倉幕府の滅亡の際、幕府の將士が禪宗を參究し、奮然として死を決した事實が少くない。實際宗風の感化が傳はれるものと見らるゝのであつた。

元弘三年五月廿二日北條氏一門の最後を飾つてゐる勇將長崎次郎高重が數〻奮戰し、後南山士雲を問訊し、一拶して曰はく、如何なるか是れ勇士恁麼の事、と。南山曰はく、吹毛急に用ひて前まんに如かず、と。高重卽ち領し、敵軍に突擊して血戰奮鬪し、幕府に火焰の起るを見て、泰然として自刃した。この際尙ほ鎌倉の禪宗が武士の精神を支配し、一道の活氣を迸出してゐるものと云はねばならぬ。

建武中興以後、禪宗の中心地は全然京都に遷移し、始めて禪寺の制度が確立し、五山十刹が整備することゝなる。

【七修類藁】五　五山十刹

餘杭徑山、錢塘靈隱、淨慈、寧波天童、育王等寺、爲禪院五山、錢塘中竺、湖州道場、溫州江心、金華雙林、寧波雪竇、台州國淸、福淸雪峯、建康靈谷、蘇州萬壽、虎邱、爲禪院十刹、又錢塘上竺、下竺、溫州能仁、寧波白蓮等寺爲敎院五山、錢塘集慶、演福、普福、湖州慈感、寧波寶陀、紹興湖心、蘇州大善、北寺、松江延慶、建康瓦棺、爲敎院十刹、

【宋學士全集補遺】七　天界善世禪寺第四代覺原禪師遺衣塔銘有序

浮圖之爲禪學者、自隋唐以來、初無定正、唯借律院以居、至宋而樓觀方盛、然猶不分等第、唯推在京鉅刹爲之首、南度之後、始定江南、爲五山十刹、使其拾級而升、黃梅曹溪諸道場反不與其間、則其去古也益遠矣、元氏有國文宗潛邸、在金陵、及至臨御、詔建大龍翔集慶寺獨冠五山、蓋矯其弊也、國朝因之、錫以新額、就寺建官、總轄天下僧尼、云云、

住持淨慈禪寺孤峯德公塔銘

古者住持各據席說法、以利益有情、未嘗有崇卑之位焉、逮乎宋季、史衛王奏立五山十刹、如世之所謂官署、其服勞於其間者、必出世小院、俟其聲譽彰著、然後使之拾級而升、其得至於五名山、殆猶仕宦而至將相、爲人情之至榮、無後有所增加、緇素之人往往欣豔之、然非行業夐出常倫、則有未易臻此者矣、云云、

【旱霖集】　秀峰說

應子從容曰、二三子欲聞五山十刹之故乎、五山之稱古無今有、今有何、貴寺不貴人也、古無何、貴人不貴寺也、云云、

彼方乃吳越錢王置之、後世沿爲不革、此方乃關東平元帥置之、云云、

【建長興國禪寺碑文】　遍擇靈地、至建長辛亥得之於山內、曰巨福禮鄉、十一月初八日開基創草、爲始作大伽藍、擬中國之天下徑山、爲五岳之首、云云、

【建長寺鐘銘】　巨福山建長興國禪寺鐘銘

南閻浮提各以音聲長爲佛事、東州勝地、聊茂榛莽、剏此道場、天人影向、龍象和光、雲歛霏開兮、樓觀百尺、嵐敷翠掃兮、勢壓諸方、事既前定、法亦恢張、圓范洪鐘、結千人之緣會、宏撞高架、鎭四海之安康、脫自一摸、重而難揚、圓成大器、鳴則非常、蒲牢纔吼、星斗晦藏、群峯答響、心境俱亡、扣之大者、其聲遠徹、扣之小者、其應難量、東迎素月、西送夕陽、昏寐未惺、攪之則寤、宴安猶恣、警之而莊、破塵勞之大夢息物類之顚狂、妙覺覺空、根塵消殞、返聞聞盡、本性全彰、共證圓通三昧、永臻檀施千祥因此善利上祝親王、民豐歲稔、地久天長、建長七年乙卯二月廿一日

本寺大檀那相摸守平朝臣時頼謹勸千人同成大器

建長禪寺住持宋沙門道隆謹題

都勸進監寺僧淋長

大工大和權守物部重光

【圓覺寺鐘銘】　相摸州瑞鹿山圓覺興聖禪寺鐘銘

鶴岡之北、富士之東、有大圓覺、爲釋氏宮、恢廓賢聖、蹴踏象龍、範圍天地、囊括全功、鎔金去鑛、煅煉頑銅、成大法器、啓迪昏蒙、長鯨吼月、幽谷傳空、法王號令、神天景從、祐民贊國、植德旌忠、停酸息苦、超越樊籠、高揭佛日、普扇皇風、浩浩蕩蕩聲震寰中、

正安三年辛丑八月初七日、本寺大檀那從四位上行相摸守平朝臣貞時勸緣同成大器、此月十七日巳時、大鐘昇樓、洪音發虛、謹具名目于后、喜捨助緣善信共壹千五百人、本寺僧衆二伯五十員、大書舊慧寧、覺眼、宗證、道範、宗英、頭首覺泉、覺俊、師侃、玄挺、崇喜、道生、性仙、知事聰因、智足、可珍、至牧、文順、元安、祖安、西堂繼悤、自聰、德義、德詮、源清、志遠、當寺住持宋西澗和尙子曇、

當寺住持傳法沙門子曇謹銘、勸進書舊僧宗證、奉行兵部丞橘朝臣邦博、兵庫允源朝臣仲範、大工大和權守物部國光、掌財監守僧至源、道慶、

皇帝萬歲、重臣千秋、風調雨順、國泰民安、

【潙山大圓禪師警策】

（奥卷）此書者、宋國明州廣利禪寺長老佛照國師付遣宋使所恩賜也、日本國能忍令彫板願弘道矣、施淨財者尼無求、

【佛源禪師語錄】　黃檗運禪師心要後序

此集流入日本、有檀那越州刺史、篤志內典、公事之暇、喜閱是書、嘗以心要問予、予但勉其劃心一處、則無事不辨、因施財命工、以唐本摸刊廣傳、欲使本國未信直指之宗者、知有人人此心中本具一段大光明藏、輝天鑑地、爍古騰今、亦猶毘耶淨名、所謂無盡燈者也、越囑爲後序、然亦未免畫蛇添足之誚焉、

【佛源禪師語錄】　題新刊寶訓序首并偈

諸大老咳唾珠玉珍之曰寶、爲世典利邉之曰訓、具眼者輯而成編、垂于後世、照映今昔、爲物作則、依而行之、可以造聖賢之閫域、箴而佩之、可以去流俗之近習、其於禪林豈小補哉、『此書東流本國、識者秘而藏之、禪人慧文命工重刊、以廣其傳、覩其志趣、誠可尙也、因說偈以相之、

鎭海明珠光照夜、連城自璧本無瑕、叢林千古爲龜鑑、言行相應見克家、

【禪門寶訓集】

（奥卷）此書有補於叢林久矣、然本朝未有刊行、輙募衆緣、鋟梓畢工、今將此版、捨入建長禪寺正續菴、廣布流通、不惟傳揚古德之先言往行、而古倫亦有少酬夙志云、弘亥中夏幹緣古倫識

【傳法正宗記】

（奥卷）日本國相州靈山寺續先師宴海未終碩、勤進沙寶積沙彌寂惠等謹題、

今上皇帝、太皇太后、皇太后祝延聖壽、關東大將軍家息災延命、國泰民安、開縫大藏印版副納附、弘安十年丁亥九月日

鎌倉武士と禪　終

大正五年十一月廿六日印刷
大正五年十二月三日發行

鎌倉武士と禪
定價金八拾錢

著者　鷲尾順敬　東京市小石川區表町百九番地
發行者　古藤田喜助　東京市牛込區榎町七番地
印刷者　渡邊八太郎　東京市牛込區榎町七番地
印刷所　日清印刷株式會社

不許複製

發兌　日本學術普及會
東京市小石川區表町百九番地
電話番町三七六八
振替東京二八一八六

歷史地理學會監督

# 歷史講座

◀第一期六冊完成▶

紙數各編三百頁內外

定價各金八十錢送料八錢

上下三千載の國史を縱斷して其の研究を試みたるは從來史家の業。之を橫さまに達觀して其の時代の特色眞相を攷覈せるものに至りては不幸にして未だ多く之あるを見ず。本會乃ち大學擴張講義の特色に參酌し。專門に偏せず通俗に陷らず簡明達意以て日本歷史の側面的研究を全からしめんとす。若し夫れ其の著者は皆當代斯學の權威。本書が如何に斯界に重きをなさんかは請ふ就いて之を本書に徵せよ。

第一編 帝都 文學博士 喜田貞吉氏

第二編 田沼時代 文學博士 辻善之助氏

第三編 城郭之研究 文學博士 大類伸氏

第四編 國史問題 正面觀側面觀 文學士 大森金五郎氏

第五編 莊園制度之大要 文學博士 吉田東伍氏

第六編 勤王論之發達 文學士 本多辰次郎氏

發兌 日本學術普及會 東京市小石川區表町六番地 振替口座東京一八二三七八六 電話小石川一八一六八八


## 教育講座既刊書目

東京帝國大學教授文學博士 加藤玄智先生著『宗教之學術的研究』

日本女子大學教授文學士 河野清丸先生著『自動主義最新教授論』

東京高等師範學校教授理學博士 丘淺次郎先生著『人類之過去及現在未來』

東京帝國大學教授 高島平三郎先生著『兒童之精神及身體』

早稻田大學教授文學士 內ヶ崎作三郎先生著『近代文藝之背景』

東京帝國大學教授文學博士 松本亦太郎先生著『教育的心理學』

文學院大學在學士 楢崎淺太郎先生著『現今教育思潮批判』

東京帝國大學教授文學博士 吉田熊次先生著『感化教育之研究』

文學士 加藤成俊先生著『教育之衞生』

文學博士 富士川游先生著『現今之自由意志問題』

東京帝國大學教授文學博士 中島力造先生著『實踐倫理要義』

東京帝國大學助教授文學士 深作安文先生著『日本教育行政法論』

文部省參事官兼督學官法學士 武部欽一先生著

定價（第一編ヨリ第九編マデ）金七十錢（第十編ヨリ第二十編マデ）金八十錢

## 教育講座第二期開始

第一編

# 歐米の社會と日本の社會

東京女子高等師範學校教授
東京帝國大學講師　文學士　小林照朗先生著

東西文明の彩光は今や我が帝國に於て接觸の地を發見せり、知らず如何の色彩を現せんとするか。丹碧鮮黯擧げて自然に委すべきか、否々、進んで之が配合に當り、我が特有の文化に加へ燦爛萬朶の花となすは、實に我が國民の天分ならずや。著者は我國社會學の權威たり。我同胞の自覺を熱望するの餘、犀利の識見を以て彼我社會世活の比較を試む、即我を知り彼を知つて此天分を遂げしむるの意なり。流麗の筆致時に微細を極めて纖流の巖罅を穿つ如く、卓落の論時に大河の決する如く、所謂尋常學究の企及すべき處にあらず、先覺を以つて任ずるの士必ずや一讀せざるべからざるの書なり。

菊判四百頁
定價金壹圓五十錢
送料十二錢

東京市小石川區表町
日本學術普及會　振替口座東京二八一八六



## ◀最新刊▶

本書は故文學士藤田明君が、生前其の專攻の研究題目として遺されたる『上古の東海道』『鎌倉時代の東海道』以下十數篇と斯界の泰斗十數氏より特に寄稿せられたる高説卓説を編纂したる前人未發の大論文なり。而して本書の利益は特に藤田家教育資金に提供するものなれば、希くは同好の士、奮つて愛讀あらんことを。

# 日本交通史論

日本歷史地理學會編纂（新刊）

總紙數七百頁餘
定價金貳圓卅錢
送料十六錢

◎本邦太古の交通……喜田文學博士
◎古代の船舶の種類及其の發達……吉田文學博士
◎驛舍と貫……久米文學博士
◎交通と宿驛……大森文學士
◎飛脚の變遷を論ず……樋畑雪湖
◎吾が入唐入宋と五台山天台娥眉山……松井文學士
◎王朝時代に於ける土佐の官道……沼田頼輔
◎古道の研究……三浦文學博士
◎神社の交通……八代國治
◎後北條氏傳馬の制……渡邊文學士
◎德川時代の街道及宿驛に關する一、二の所見……内田文學博士
◎木曾福島驛……堀田文學士
◎三百年前に於ける外人の日本旅行……大類文學博士
◎幕末東海北陸二道の通行見聞錄……星野文學博士
◎明治初年の交通……岡部文學博士

發行所　東京市小石川區表町一〇九　日本學術普及會
振替東京二八一八六　電話番町三七六八番

◀歴史地理學の好資料◀

▼水、水、水を知らざるべからず▲

文學博士　吉田東伍先生著

# 利根治水論考

紙數二百五十餘
定價金壹圓
送料十二錢

古人いはずや「兵なるものは百年も用ゐざるを得べし、併しながら一日も水に備へずんばあるべからず」と、激流狂瀾多き日本の如き邦土にありて古來水は爲政者の心力を凝らして苦心したるものなり。博識にして政治の要道に達せる吉田博士の此の著は眞に世を益すること大なり

▼水利を計るは爲政者の要訣▲

發賣所　東京市小石川區表町九〇一　日本學術普及會

振替東京二八一八六　電話番町三七六八

355
16x

終